

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

7



第七十八卷 第七号 日本幼稚園協会

新刊案内

私の生活保育論

●本吉圓子／著

■定価1,200円・A5判・328頁

くどこの園でも今までこうしてきたから」と従来の保育に慣れきっている保育者に贈る問題提起の書。カリキュラムで子どもを追いたてない保育を実践記録で示します。

本吉圓子著

私の生活保育論



夏を楽しむ

●フレーベル新書 B6変型判・104～232頁

自然物のおもちゃ

滝田要吉／著

定価550円 円120円

子ども動物園

遠藤悟朗／著

定価650円 円120円

魚のせかい〈魚の不思議・飼育ノート〉

杉浦 宏／著

定価600円 円120円

たのしい昆虫教室

矢島 稔／著

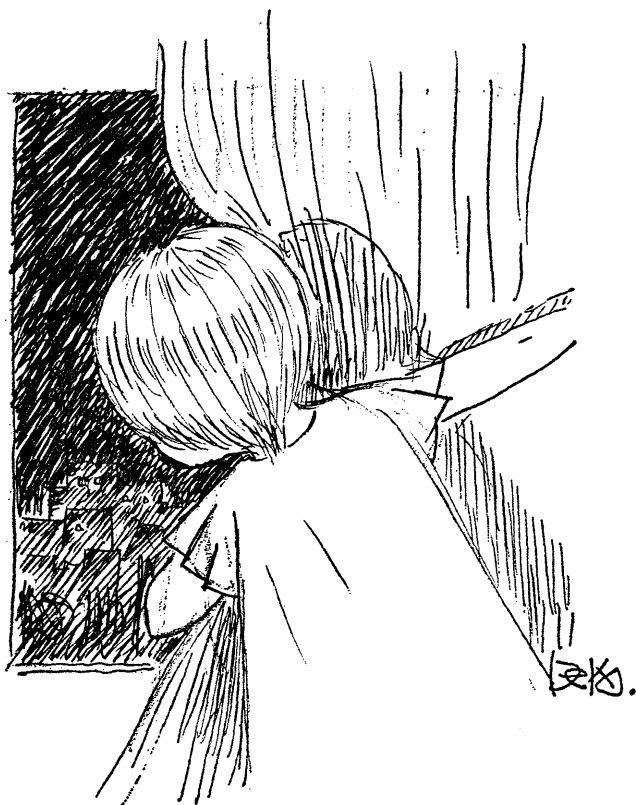
定価600円 円120円

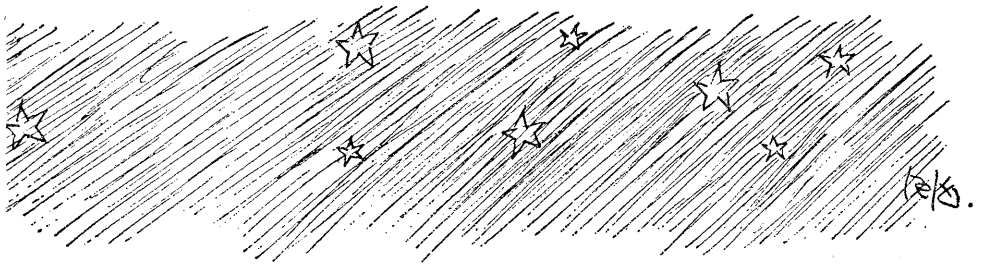
くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育

第七十八卷 第七号





幼児の教育 目次

第七十八卷 七月号

© 1979

日本幼稚園協会

表紙 油野誠一
カット 中島英子

すべてのわざには時がある……………南 信子(4)

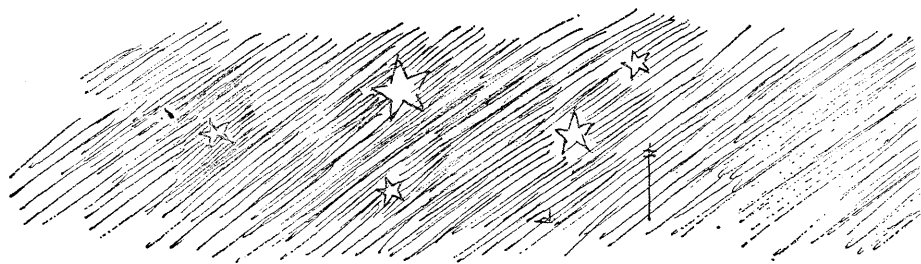
★講演

むずかしい今の幼児教育……………関口はつ江(6)

「幼児の教育」復刻記念懸賞論文募集……………(14)

子どもとおぼけ……………村田修子(16)

怪力乱神帖……………和田陽平(21)



わたしのバケモノ……………益田勝実…(26)

幽霊と人魂……………秋山さと子…(30)

子どもとおぼけ……………坂上明子…(34)

◇園長室の窓から

保育を考える……………松島ふ津…(36)

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——(その十)……………海老沢敏…(42)

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(二十八)……………津守真…(50)

史料紹介

『マイ・ダイアリー』(最終回)……………エリザベス・ギヤスケル
笹川真理子訳…(58)

すべてのわざには時がある

南 信子

「すべてのわざには時がある」これは旧約聖書のことばの一節であるが、教育における「時」はハヴィガストが、その適時性の原理の中で重視している事柄でもある。特に教育の現実の場で、誰もがいやという程経験する事であり、すべての事が時にならう時、美しく花咲き実がみのり、所謂教育が効を奏する事を知らされるが、時がわるければ、すべてのわざは空しいことを痛感するのである。

有名な精神科医トウルニエは、『人生の四季』という著書の中で、人生の絶え間のない発展と生成を、自然の季節の移りかわりとの類比においてとらえ、幼年時代を人生の春と表現している。生後一年頃に受けた、思いつくとしても残らない程の情緒体験でさえ、その子供の全生涯に最も決定的な役割を果す事があることを述べ、春にはやわらかな芽が吹き出て

光に向って開き初めるが、その時すでに未来が予感されはじめていると興味深い言葉で語っている。人生の初期の段階である幼児期という時の教育の重要性を今更のように考えさせられるのである。

さてこの重要な時期に幼児教育は何をなすべきか、いくつかの点について考えてみたいが、要は、幼児教育は人間の心を育てる基本的な教育であるという事である。「心」というのは、人間の知、情、意、の統一的根底にあるものであり、人間の存在そのものを根底において支えているものである。如何なる場面に遭遇しても、いきいきと人間らしく生きる事ができるかどうかは、結局人間らしい心をもっているか否かによるのであり、それ等の基礎的な経験はすべて、幼児期の経験によるものと考えるのである。人間らしい心を育てる幼児教育として次に四つの問題をとり上げてみたい。

一つは、基本的な欲求に対する充足のよろこびとともに、耐性を育てる事である。

人間は一生、人としての願いと欲望の中に生きるというてよい。それ等が正常な状態にあれば、健康ですべての欲望は相働いて益となるが、そこに欲求に対して忍耐する心が育て

られていなければ、欲望は人間を破滅におとしいれるものともなるのである。如何なる欲求がどのように充足されたか、如何に抑制する事を学んだか、大人の欲求に対する反応の多くは、幼児期の経験によるのである。しかも基本的な人間の欲求は、食事、睡眠等の身体的なものから、愛、信頼、平等精神的なものに至るまで、子供も大人もあまりかわらないといえよう。故に幼児期の間には、欲求に対する充実のよるこびと欲求に対して耐性をもつ心を育てる事に全力をそそがねばならないと思う。この時期を逸しては手おくれである。

第二に考えたい事は、幼少時から知的好奇心を大切にすることである。

知的教育は小学校からはじまると思う事は時になくなっていない。人間と物について知り、その道理をみきわめ、物事のすじ道を探索する心は、幼い日に芽生えるのであり、この時に自由な探索行動がゆるされるならば、知的な好奇心にみち、考えることのできる人格がつくられてゆくが、単なる大人の強制と習慣の中で刺激の少ない環境に育つならば、受身で消極的な行動の持主となってしまうのである。一歳を過ぎた健康な子供に見られる探索する心、好奇心を大切に育てたい

ものである。知的発達を促す幼児期の発達課題をよく理解しなければならぬと思う。

第三に問題にしたいのは、人間としての豊かな感情である。豊かな感情をもたない人間というのは、人間らしい心を失っているといつてよいのではないか、豊かな感情の持主は、少くとも自分を失うことなく表現する事ができ、いろいろの価値に感動でき、自己充足に至る方向に人生を歩むとともに、まわりの自然や、他の人と調和して生き、他者への思いやり、謙遜を生み出す方向に人格が形成されてゆくのであり、豊かな感情は人格を円満に結晶させる原動力となると思うのである。

最後に、幼児期に育てたいと思うのは、宗教心である。人間には永遠を思う心が与えられている。又内面的な見えない世界を見る事のできる感覚が幼い時からそなわっており、良心の発達は一歳半からはじまるといわれる。之等をよく指導するならば、内面的自覚的に善悪を判断する心が培われ、見えない世界を知り、絶対者に祈る心をもつように育てられるのである。すべてのわざには時がある事を銘記したい。

(北陸学院短期大学)

★講 演★

むずかしい今の幼児教育

関口はつ江

現場の悩み

私は、幼稚園の現場を担っているものですから、学問的な問題や、こうした方がよいということよりは、現実はどう対処しようかということの方が頭を占めております。

今、一番感じておりますのは、なぜ幼稚園の現場で、“こうあるべき”とされていることが、素直に伝わっていかないのか、ということ です。私自身が自分の幼稚園を通してすら、親に対しても、地域社会に対しても伝えることができない、実践したいと思っても実践できない、ということがあるわけです。ましてや短大で育てた学生を通して、実践し

てもらおうように働きかけても、なかなかそうはいきません。それが一体どうしてなのかを考えてみるために、まず現状をお話してみたいと思います。

まず、保育がうまくいく為には、子どもを取りまく社会と、直接子どもに関わる家庭・親、それに保育を担当する保育者との間の融合が必要で、調和がなされている時にスムーズに行くのではないかと思います。そういう角度で現状を見ますと、まさに幼稚園を支えている社会的状況がばらばらであることに気がきます。社会的には文部省、公立・私立の幼稚園、県当局や教育委員会の立場などがあります。そういういろいろな立場の人と関わる機会を持つことがあるのですが、

その時にいつも行き方、考えていることの方向がまるで違うことを感じさせられます。

それから、親の方を見ますと、親もまたいろいろなことで、子どもに期待するところがまちまちです。そして、保育者の方も、何を考えていいのやらわからないということがあのように思います。

そういう環境が非常に悪いことのために、保育の現場で教師が子どもに関わる時、子どもの中に深くわけ入る、とか、子どもを包みこむ、とか、ないしは子どもと一体になりながらということはしにくくなってしまっている。むしろ子どもを突き放して、対象として扱えながらその子どもの中に何を育てていくか、どういうことができるようにさせるか、というふうな、いわゆる「与える保育」というのでしょいか、そういう形になりやすくなっていると思います。具体的にどういうということがなくても、感じとしてどうも子どもと保育者がしっくりしない、ゴツゴツした不協和な状態があるようです。

それで、実際に学生や現場に出た人たちについてびっくりしたことがあります。今年保育科に入ったばかりの学生に、「保育とはどういうことかと思うか」と勉強に入る前に話を

せてみました。そうすると、それは、教えるとか型にはめることではなく、子どもの発達を助けるとか、引き出す、一緒に遊んで生活を導くというようなことが返ってきました。これはだいぶ保育についての一般の認識が進んできたと思いついて、嬉しかったのですが、その後、新任教諭の研修会の時に、そこに集まった先生達に同じ質問をしてみました。ところがそこでは、入学前の練習をさせる、集団への適応、しつけ、基礎的能力をつけさせる、など、いわゆる就学のための準備期間であるという答が全部の人から返って来たわけです。このずれは何なのだろうかと驚きます。

本来、子どもを育てる、保育をすることは教えたり、訓練することとイコールではないことを知っていたはずなのに、そしてそれを教えて来たつもりなのに、一たび現場に足を踏み込んでしまうと、そういう考えが通用しない現実になってしまいます。

そういうふうに変ってしまうことの原因の一つに先程、環境の問題を出しましたが、私の最近の体験から例をひいて具体的に考えてみたいと思います。

幼稚園の周辺

私共の幼稚園のそばにもう一つ学校法人の幼稚園がありまして、その間に新しい園が出来る動きがあります。これは、幼稚園の適正配置ということからして問題があり、幼稚園間に混乱を起すこととなります。私立幼稚園では園児の獲得が大事になりますから、経営優先の幼児教育になりがちです。十分な数の園があるのに新しい園ができますと混乱を引き起すことになるので、何とかやめさせるようにした方がよいのではないかと、県や市にお願ひしたり、いろいろなことをしたわけです。結論は出ていないのですが、市に訴えますと、市当局は私立幼稚園の認可には何ら権限がないのだから、自分達で解決すべきだ、という姿勢なんです。県の方はどうかといえば、県は認可基準に合えば認可せざるを得ない。もし、認可しないで行政訴訟を起されれば県は勝ち目が無い、といえます。

そういうふうにして、幼稚園が乱立します。他の地区もそういうことはあると思いますが、文部省が就園率を上げよう、ということと園の設置に対して補助をしています。新しい園ができていくことが、本当に良い教育を進めることにどれだけ役立っているかといえはさきか疑問になります。新しく認可になった幼稚園の場合、保育の内容、姿勢が一般

に目立つような特定の教育、知能教育をするとか、ある特殊のことを教えますとか、スクールバスを親切に回しますとか、施設が冷暖房完備ですとか、教育的な観点からは、首をかしげなければならぬようなことを売りものにして子どもを集めることが多いのです。そうしますと、既設園で、良心的にコソコソと目立たない仕方と保育している園が、それでは立ち打ちできなくなるといふことで、何か目立つことをはじめます。悪循環になっていきます。

それではなぜ、目立つことをやる幼稚園がはやっていくかを考えますと、親の要求や好みによって、ということになります。そのような事象を考えてみますと、教育の流れを作っているものが教育者ではなく、社会常識や、他領域の考え方が教育の流れを作っているように見えてきます。保育界を支配している考え方が、如何によい人間を形成するかという教育的な観点ではなく、もっと別な観点、経済的な、社会的な視点であって、それに基づいて教育の内容が決められてしまふ、そこに大きな問題があるように思います。

以上は、私幼の場合ですが、一方、公立幼稚園はどうかといえますと、多くの公立幼稚園は小学校の校長先生が園長を兼ねていらっしゃいます。

どうしても、幼児の特性に基いた教育よりは、小学校教育をそのまま引き下げたような形で教育が行なわれる傾向があるようです。

このようにみてきますと、保育者が一生懸命考えて幼児に即して保育したいと思うことと、園長や設置者が期待することとの間に敵しい対立や矛盾があることがわかります。

保育者の問題

そういう状況の中の保育者はどうなっているのか、といいたまうところにも大きな問題があります。保育者が本当はこうしたいと思うことと、上からこうしなさい、といわれることとの間にギャップがあるのですから、保育者が全く主体的に行動しなければならぬのですが、最近の保育者には、主体性が欠けるといふことがいわれています。もちろんむずかしさもありましようが。

園長と教諭の体質の違いがそれです。園長の小学校の経験が長かったり、教育畑の出身でない人であったりしますと、保育者とは経験やものの見方が異質になり、体質が違ってくる。小学校以上の場合、校長と先生方は同じような経過で勉強し、同じ道を歩んで、先輩、後輩という関係で指導さ

れますが、幼稚園の場合は、先生方は養成校を経て、一応子どもの勉強はしていますが、園長が幼児のことについては素人だといふことが多いわけです。素人に指導、指示されながら保育しなければならないのですから、ずい分大変なことです。

保育者に主体性がない、ということに関連しますことの一つに、最近の保育ブームによる保育者志望者の増加が考えられます。この間の小学生対象の調査でも、女の子に一番人気があった職業は保育者であったようです。しかし、保育者になりたい人が広がれば広がる程、それが一般的な仕事として、ある訓練を受けさえすれば、またある技術を身につければできる仕事であると受けとめられ、本人の生き方や在り方に深くかかわる仕事とは考えられなくなってしまいました。

また、今の若い人たちが育ってきた状況を考えますと、生活自体が分業化し、他の人に頼って暮す領域が多いため、自分の生活全般を自分でとりしきっていく、自分のことは自分が決めていく、主体性が失われやすい状況だと思われまう。本当に自分はどういうふうにしたいかというよりは、他人様に意見を伺って、その指示に従って、その通りにすればいい、ないしはその通りにしなければならぬと思っているこ

とがあまりにも多すぎるようです。

この間、ある研究会でのエピソードですが、音楽リズムに
関した集まりで、ある先生が「鼓笛隊指導をしなければなら
ないのですが、鼓笛隊の編成はどうすればよいのですか。」と
質問をしました。助言の先生が一言のもとに「それは自分で
決めることです。」と言われました。こんな単純な例からし
ましても、自分の耳で確かめたり、こういう音を子ども達と
作ってみたいという自分の中のイメージがない。もつと極端
にみれば、子どもと共にその活動をこういうふうにやりたい
という主体的な要求がなくて、ただ形だけそれをやればよい
というような、保育者の姿勢があるんですね。

親の在り方

次に最近の親の特徴について考えてみましょう。今の方は
非常に経済優先の考え方なんでしょうか。月謝を払っている
のだから、何かやってもらうのは当然だという意識が強いよ
うです。子どもを幼稚園に入れたために、自分の方がいろい
ろしなければならぬ、お弁当を作らなければならぬなど、
仕事が増えるとなると、それは困る。お金を払って子ども
を見てもらっているのだから、当然自分の労力は軽くなる

なければならぬ、支払った分に見合っただけの見返りが子
どもの中にあるべきだと考えるようです。例えば、歌を何曲
覚えたとか、絵を描くことが上手になったとか。

幼稚園の父兄との懇談会で、父兄からはつきり要求が出た
りします。「先生、一月に二曲ぐらいは新しい歌を教えて下
さい。」というのです。「そういうことは、子どもの音楽性を
伸ばすこととあまり関係がないのではないですか。それはた
だ、おかあさんが満足するだけではないのですか。」とい
ますと大変不満な顔をします。そのような事例に出会いま
すと、親の教育への要求といえますか、期待というものが、非
常に即物的になっていることがわかります。

どうして、今の親にそういうことが起ってくるのか、私な
りに考えた単純な考えですが、生活の仕方がすべて合理的に
なってしまうとして、これだけのものを投入すればこれだけ
のものが返ってくる、「インプット⇨アウトプット」になる
事象が生活をかなり支配しているところに問題があるのでは
ないでしょうか。沢山投入しても何も出てこない。六十円入
れても牛乳が出てこない、ということには我慢ができない。
けれども、子どもの教育の場合にはいくら投入しても、その
結果が出てくるはずと先であったり、外にはその効果が

出てこなかったり、場合によっては投入しっ放しで終ることもあります。にもかかわらず、それは信じられない。そういう不合理は信じないという習性が今の人たちには多いのではないのでしょうか。

生活の仕方を考えてみますと、例えば農業では、土地とか自然の恵みがあって、自分が働いたこと以上のものが、いろいろなものに支えられて沢山返ってくるがあります。また、商売の家ですと、家名とか家柄とか、伝統があって、自分がやったものに、今迄ずっと続いたものが一緒になって結果が返ってきたりします。また、全くその逆もありましよう。ところが、現代の給与所得者の暮しでは、何日間、何時間働いて、それに対していくらのお金が返ってくる。ちょうど自分の努力と見返りがイコールになるといような暮し振りです。沢山働いたけれども少しも返ってこなかったとか、余り働かなかったのにいろいろな恩恵によって多くのものが返ってくる、ということはありません。こうして、生活の回転が数字で説明できるような暮し方によって、教育に對しても、何か直接的に割り切って説明できなければ満足しないようなところが、出来てきたのではないのでしょうか。

こういうことをとりまゝとめて考えてみますと、状況はともむずかしくなってきました。本質的に子どもたちに大切だと思ふこと、あるいは、親に大切だと思ふことをわかつていただきたいと思うのですが、その通りにいかないわけです。行政や園の経営者の方向がまちまちであったり、親は外に現われた保育の効果を求めたり、保育者は、自分が何を為すべきかの本音で行動できないというような状態ですから、互いに孤立したばらばらな関係にあります。暗黙のうちに認め合ふことがなくて、何か明確な外側の基準が欲しくなるのですね。何をどこまで教えればよいかということをよく聞かれるようになるわけです。どう教えればよいかという技術講習会や研修会が繁盛していますが、結局講習会がはやっても、それは保育者が安心して力一杯保育がやれるようになるための問題については、何も解決することにはならないと思ふのですが、そういう現状にあるということですが。

幼稚園は何をしてやれるのか

子どもにとって大切だと思ふことや、本質的な事がなかなか実践に移されないという事の中で、さらに突っ込んで考えさせられるのは、一体今の子どもたちの生活の中で、幼稚園

の必要性はどこにあるのだろうか。幼稚園は子どもたちに何を
してやることができるのであろうかということだ。幼稚園
園で子どもたちにやってあげられることが、子どもの本質に
関わる事ではなくて、末端でしかないとすれば、それでいい
のか、或はそれだけしかしてやれないのが幼稚園というもの
なのかということにすらなるわけだ。

私の幼稚園に関わる経験の中で感じますことは、子どもた
ちがだんだんひ弱になり、ボスのような子どももいなくなっ
て、何となく飼いならされたおとなしい、おとなが扱いやす
い子どもが多くなって来ていることです。しかし、逆に見れ
ば幼稚園の先生たちは、そのような子どもにすることを期待
している面がないとはいえないのではないかとも思われま
す。教材や遊具、活動場を子どもたちが活動しやすいよう
にと考えて、工夫して提供するわけですが、こういう物で活
動したり生活することが、本当に子どもたちをよく創ること
になるのかどうか考えてみなければなりません。

よくいろいろな方の話に、本当の人格を創ってくれたの
は、箱庭的な幼稚園の生活ではなく、その外側にあった生々
しい、もっと苦しかったり悲しかったり、嬉しかったりいろ
いろあるけれども、もっと危険をはらんだ生活の中であつた

ということが出てきます。園では、いろいろなことに子ども
が興味を持つたり、関心を持たせたりするために場面や教材
は与えられます。確かに興味や関心は育つかもかもしれませんが、
そこで終ってはいないか、もっと突っ込んでいって、そ
の中から子どもが自分のものとして心に止めたり、自分を展
開できているのでしょうか。

実際に子どもたちが喧嘩をしていたり、危険に出会ってい
る場面に遭遇すれば、保育者はなんとかうまく解決させよう
と導きます。これが教育的関わりだと思えます。危険に直面
している子どもを見捨てて行ってしまうような先生は、非教
育的であると考えられますが、そうした苦しい体験の中で育
ってくるものもあることは否定できません。教師の教育的な
配慮や関わりが子どもを育てる部分は沢山ありますし、その
つもりで教育の仕事にたずさわっているのですが、先生の扱
い方が適切にスムーズにいくようになったために、子どもの中
に強いものが育ちにいく、ということも考えられます。

これは、ある意味では一つの宿命であるかもしれません。
子どもを可愛いと思ひ、理解が進んできますと、子どもを冷
酷に扱ったり、活動しにくい場を作ったりはしなくなります
から、——こうして、本当に厳しい、生の体験を幼稚園が子

どもに体験させてやることができないのだとしたら、それは
鼓笛隊をさせるとか、おけいこブックをやるとか、技術的な
事をやるのと五十歩百歩なのではないかとの悩みをもつてい
ます。

文化が進めば進む程人間がひ弱になって来ているといわれ
ています。幼稚園の教育も進めば進む程ある部分を落してし
まうことがあるのかもしれませんが、バランスよく考えれば、
子どもたちに文化の先を進めるように高度な知識や技能がも
てるようないろいろな筋道を提供してやる側と、原始的に自
分の本性に立ち戻った根源的な生活を存分にさせてあげると
いうことと、二つの役割が幼児教育にはあるのだろうと思ひ
ます。しかし、現在の幼稚園の既成の枠組の中では、そのど
ちらもしてやれていないのではないかと反省を持っており
ます。

そこで、今保育者にどういう事が必要なかと、私なりに
考えておりますことは、ひとつは保育者養成の側から、技術
指導をできるだけ排除してみたい、子どもが生きていくとい
う中心的な課題にだけ目を向ける、ということを試みてみて
はどうかと考えております。もう一つは、保育者の個性を強
くするようにしたいと思います。保育を志望する方は穏やか

で、良心的で、言ってみれば可もなく不可もない傾向がある
といわれます。目立たない、平凡で、堅実ではあるが、リー
ダーシップはとりにくいタイプが多いといわれ、人の先に立
つよりも、人に従うという姿勢がどうしても強くなる。皆に
合せていきましょうとか、人に聞いてから問題なく処理しま
しょうという傾向が強いのではないのでしょうか。保育者にな
る過程でも個人的な責任とか、その人の個性を發揮する機会
が失なわれていて、一つのコースで、ある決ったところまで
修得できればそれで幼稚園の先生になれるようになってしま
っています。しかし、ひとりひとりが目立った存在で、自
分の個性を發揮しながら生活して行く中で、保育を主体的に
担うことができるようになってほしいと思っています。

いろいろな状況を考えてみまして、今の現場の問題を解決
することができるのはどうしても当事者以外にはなさそう
だ。保育を担っている先生方がどれだけ頑張れるかにかかっ
ているのではないかと感じております。

(郡山女子短大)

一九七八年九月二〇日に幼児教育
現職研究で行なわれた講演より

『復刻・幼児の教育』

『幼児の教育』一巻～二十巻までの復刻が完成しました。

「我国教育界の刻下の急務は、児童教育法の研究と、母としての婦人教育の普及にある」とうたい上げた創刊号を手にすると、当時の関係者たちの熱い息吹きが伝わってきます。

明治三十四年、保育界は、創設の混沌の中から、漸く、新しい方向をつかまえていたのです。

そして、巻を追うごとに、日本の保育の成長の道すがら明らかになってきます。それは、大正期へ向けて徐々に夢をふくらませ、やがて、「誘導保育」という形で華麗な花を開かせていくのです。

従来、この雑誌は完全な揃いがなく、閲覧の困難さが歎かれています。この度、関心を抱く多くの人々の傍におかれるべきものと考え、復刻刊行に着手致しました。過去を問い、現在を考える手がかりとして、広く活用されることを願

っています。

全二〇巻、別巻一、A5判、クロス装、外函入 題字・東山

魁夷、別冊記念論集

《一巻～二〇巻》『婦人と子ども』明治三十四年～大正七年

『幼児教育』大正八年～大正九年

編集委員 津守 真

本田 和子

堀合 文子

〔刊行〕名著刊行会 〔価格〕現金価格 一八六、〇〇〇円

〔申込・問合わせ先〕総発売元・株式会社コーディック

東京事務所 東京都千代田区神田神保町一―四七

大森ビル TEL 東京 (〇三) 二九五―〇一八六

本社 大阪市東区今橋二―二二 藤浪ビル

TEL 大阪 (〇六) 二二七―五三四一 (代)

『幼児の教育』復刻記念懸賞論文募集

このたび、雑誌『幼児の教育』復刻を記念して、左記の要領で論文を募集することになりました。多くの方々、優れた論文をおよせくださいますことを、期待しております。

〔記〕

一、復刻『幼児の教育』を素材として、独自の考察を試みたものであること。

一、応募期日 昭和五十五年九月末日まで

一、応募要領 ペン書き（またはボールペン）とし、四百字詰縦書き原稿用紙に四十枚以上百枚

以内。上表紙に「復刻記念懸賞論文」と朱書の
上、「論文題目」「姓名」「住所」「所属」を記入
のこと。審査は上表紙を外し、本文のみを対象

として行ないます。尚、名前入りの原稿用紙は御遠慮下さい。

一、賞金及び賞品 最優秀賞一名 賞金二十万円

二等賞 二名 五万円

三等賞 三名 一万円

参加賞 全員 記念品

最優秀論文は、本誌に掲載いたします。

一、問合わせ及び応募先

〒112 東京都文京区大塚二―一―一 お茶の水女子大学附属

幼稚園内 日本幼稚園協会『幼児の教育』編集部

尚、電話での問合わせは御遠慮下さい。郵便でお願いいたします。

主催 『幼児の教育』編集部
後援 株式会社コーディック

子どもとおばけ



村田修子

夏が近づいてきますと、昔から怪談話に花が咲き、マスコミでもそれに類するものがとり上げられ、放送される落語や講談の演題にもにぎにぎしく登場してくるのが常です。

「それはおばけだ」

「手がないだろ」

「おばけは足がないよね」

「おばけ知っている。おばけやしきに入ったから」

「おばけみたらこっちに追いかけてきた」

「しっしっっていったの」

「かえるがおばけ」

「へびがおばけ」

「コブラがおばけ」

「おうちにあるよ」

「いないよ、いないよ、ほくんちにはいないよ」

「うちにはおばけいるよ、だっとうちにこの本あるもの」

「田舎んここにいるよ、倉庫に、夜出てくるんだよ。おとなが言っていた」

「○○ちゃん見たよ、白いんだ」

これは『ねない子だあれ』の本を私が持っているのを見た三

歳児の口から聞かれたことばです。そしてキヤーキヤー、ワイワイ、なかなかそのさわぎは治まらないで、それぞれがおぼけをテーマに、今迄の自分の体験や誰かに聞いたこと、想像したことなどを発表してくれました。

おぼけについては、こういうものという定義があるわけではありませんし、勿論誰も実際に見たというものではないのですから、どういうときに、どういうきっかけで関心を持つようになるのだろうかと考えてみました。どうも遊園地などに設営されている「おぼけ屋敷」の経験が一番大きい影響力を持っているように思われます。勿論それ以前にも絵本で見ることがあったり、「舌切雀」などのお話の中にも出てきたりしていますので、それ等の経験が重なって次第に、こわいもの、気味の悪いもの、という観念が固定化していくのでしょう。

ちなみに、今私のそばに居る二歳半の孫は「おぼけがこわい」とは言いません。彼が今一番こわいものは「狼」なのです。「三匹の子豚」たちを追いかける狼、次に聞いた話の中に出てくる赤ずきんをたべてしまう狼、狼の書かれている頁は早くめくってしまったり、おもちゃで遊びながらひとりで何か言っているのを耳をかたむけて聞くと「狼は木の陰にかくれて、じいっと子豚たちを見えています。」と本に書かれている通りにいって

るのです。そして「狼こわいね」「狼くる？」というように、また、動物園に行っても「狼もいる？ 豚もいる？」というように最大の関心事なのです。

その子はまだおぼけということばも、どんなものらしい、ということも何も知りません。でも、電気のついていない暗いへやには一人では入って行きません。よちよち歩きの手をささって手をつないで一緒に行って自分の必要なおもちゃを持ってくるときがあります。全く知らないのですから「おぼけが出るから」とはいいません。彼にとっては「狼がじつと木の陰でみているから」ということなのでしょう。このことからして、幼い子の心の中にあるおぼけと狼は、この段階では同じものである。おぼけ」ということばをいろいろな形で知ることによって、多分狼はおぼけにとって代られるだろうと思われまます。何をきっかけにして、いつ頃そう言い出すようになるか興味を持って見ている最中です。そしてそのとき多分弟の方はそれと同時に「おぼけはこわいもの、というようになることだろうと思っています。

自分が小さかったときのことを振り返ってみますと、いつからこわく思ったかということは勿論定かではありませんが、田舎の道は狭くて暗かったので、夜親戚の家から帰るときなど、

母のたもとで顔をおおって、なお目をつむってねむって歩いて
いる様子をよそおったりしました。暗やみがこわく、然もそこ
に何か（おばけ）を見たらなおこわいので目をつぶっていたに
違いありません。

それでも昼間はまわりが見えるのですから心強かったのでし
ょう。もう一つの経験として、おばけが出る、と噂の立った家
に見に行ったことがあります。小さかったので、何故噂が立つ
たのかは知りませんでした。変った不幸があったのかも知れ
ません。多勢の人が遠まきに集まっていた、玄関横のはき出し
の小窓を指して、あそこからおばけが出るのだと教えてくれた
ので、立ったり、しゃがんだりして長い間じいっとその窓を見
つめていましたが、一向に何のことはないので半分がっかりし
て家に帰りました。

今思えばその家の人たちはどんなにいやな思いをしたこと
かと同情の念でいっぱいですが、こわいもの見たさ、にかり立
てられるのはいつのときも同じようです。

ですから園での今迄の経験からみると、子どもたちはそれぞ
れの年齢相応に興味や関心を示します。

三歳児の一月頃、女の子が突然「おばけ屋敷しよう」と言い
出しました。聞くと、どこかの遊園地のそれに行ってきたとい

うのです。けれどもこれは三歳児という年齢のせいもあって、
周囲のひとたちが全然のつていかなかったもので、その子の経験
を聞くというだけで終ってしまいました。

今迄におばけをテーマにしてすばらしく盛り上った経験が二
回あります。どちらも五歳児の組で展開しました。

おばけ屋敷ごっこ

このようなテーマは教師側の意図ではなく、子どもたちの話
題が次第に盛り上り、それに教師も加わり手伝うという形で発
展していきます。

或る日突然、「おばけ屋敷」の経験をしてきた子どもたちの
話しが盛り上り、相談がまとまったらしく、自分たちでいろい
ろな材料を工夫して使って、三つ目小僧と、のっぺらぼうがで
き上りました。

子どもたちは作ることに次には、それよりもそれを使ってほ
かの人をおどろかしてやるうという気持の方が先行しますの

で、やや雑に作り上げたそれを持ってへやの中の人や庭で遊んでいる人にくつつけたり追いかけていたりしています。最初は驚いた人たちも次第になれて驚かなくなりです。

その結果、もっとたくさん作らなければ駄目らしいことが話し合われて、たくさん作ってへやの中をおぼけ屋敷にしてみんなを呼ぼう、ということになり、目標がはっきりするとまた気分が盛り上って、次の朝、多くの人が、「これをやろうと思っ

て張り切って来たな」、ということが分るような充実した顔で登園してきました。

でもその張り切った様子を見ていると、一生懸命に作るひと、そのまわりにおいて、わいわい言って張り切っているひと、「おぼけ屋敷しますから見に来て下さい」、とまだ相談も何もできていないのに、浮き浮きした様子で何回もさそい掛けに出かけるひとありで、いろいろな張り切り方があるものなのだ、と改めて感心しました。

それをまとめる段階になると少数のプランナーが、ここに机を置いて、その下にもぐって出せばいいとか、ここは上からぶらさげて人が来たら紐をゆるめておろすとか、暗くしておいて懐中電燈で照らすとか、大きな段ボールの中をくぐって通るようになっておいてそこへ光るものをぶらさげたり、順路はこ

うで、こっち出口等々、他の子どもたちもそういわれることにすっかりのって協力している。何のことはない、いわゆる遊園地などでよく見掛けるおぼけ屋敷もどきなのですが、子どもたちの生き生きとした顔付き、きびきびとした協力の仕方を見ていると、子どもにとっては興味と関心のある活動に勝るものはない、ということを感じさせられたごっこでした。

小さい組の人たちにも参加してもらって大きわざをしたあと、へやを片付けないまま全員が庭に出て行って活発に動き回っていたことも普段の様子とは全然違った現象なので、それも何か意味のあるひとこまだったように思っています。

また、このように突発的に盛り上がったことや、スリルを味わったり期待する類の事がらは余り長い準備期間があると、盛り上った気持が崩れてゆき易いように思われました。

ぼうずめくりならぬ、おぼけめくり

お正月に、ぼうずめくりをした経験から、その遊びをしたいということになって、それがいいために「作っただい」、ということになりました。

相談はまとまったものの、子どもの表現では普通の人とおぼ

うさんの区別がつけにくく、特に書いた本人は分っていても、多くの人と共通理解がされないと遊びがスムーズに流れない、という経験へたあとで、たまたま一人の子の書いた絵が、おばけのようだったことから思いついて「おばけめぐり」にしよ、ということになりました。

普通のカルタの四倍ぐらいの大きさの紙に人や花を組み合わせて書いたものと、自分たちが思いついたおばけの二種類をきこうということになりました。女の子は多く前者の絵を描き、男の子はおもしろがっていろいろのおばけを描きました。これも男の子と女の子の違いがよく分つておもしろいと思いました。

それができ上ってからは

- ・自分たちで作ったものであること
- ・遊び方が簡単で、知らなかったひとでもすぐ理解できること
- ・偶然が勝敗を左右するので、いわゆる強い者ばかりが勝つとはきまっていない、ことなどの理由で大変よく遊ばれました。

ときには帰る前にみんなが丸く腰掛けたまん中にカルタを置いてひとりずつびくびくしながらやって、わいわいと大きわざをしました。

おばけの絵を描いてよかったことは、おばけというものには規定がないので、自分が思ったように創り出せることです。考えて描き足して、どんどんとこわい感じにしてゆくことができます。ですからいつもは余り好んで絵を描かなかったひとが何の抵抗もなく紙に向っていました。

その絵を紹介できたなら、と思いましたが、自分で工夫して描いたり、たくさん遊んだものだったからでしょうか、それぞれが大事に持って帰ってしまいました。

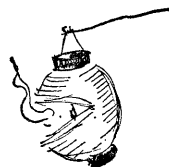
矢張り気のはいったものは愛着もひとしお、ということなのでしょう。

楽しかった、おばけあそびのひとときでした。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



怪力乱神帖



和田陽平

子、怪力乱神を語らず

論語 述而第七

怪しい夢のこと

だが、冷徹なプロスペル・メリメは魔法、予言、山賊などに異常な関心を持ち、卓抜な論理的頭脳の持主E・A・ポオは好んで怪異の物語を書いた。まことに怪力乱神こそは文明人の持つ郷愁といったものではなからうか。

安永十年丑の春、花田仁兵衛は川普請の御用で、たまたま武蔵の国押立村―現在の府中市押立町―に宿を取った。その部屋はおもやかなら廊下続きで離れており、戸垣もまばらで、表に藪が生い茂り、不用心に見えたので、戸じまりをよく改めて床に就いたが、とろとろと眠りかけた頃、天井で何か大石などの落ちたような音に目を覚すと、枕元に、よこれた縞の単物を着た

座頭が手をついて居る。脇差を取って起上れば姿は消えてしまつた。さては心の迷いかと、戸締りを確かめて床に入り、眠りかかると、また先程の座頭が出て来て、今度は両手を広げて覆いかぶさつて来る。布団を撥ね除け、脇差を掴めば、途端に消え失せた。

——耳袋・妖怪なしともきめ申しがたき事——

私にも、少しばかりこれと似た経験がある。昭和十四年の九月、朝鮮の京城——現在のソウル——に赴任した私は、東崇町の先輩を尋ねて、泊めて戴いたことがある。その部屋は居間から一寸離れた客間であつた。スタンドを消して眠ると、何となく布団の裾の方から枕元の方に人の歩く気配がして、はっと目が覚めた。目が覚めれば静まり返つて何の音もない。明りをつけたが、勿論、何の異状もない。明りを消して眠りかけると、また枕元に近づく微かな音がする。目が覚めれば何の音もない。鼠かとも思つた。動いていた鼠が、私が目を覚ました気配を察して静まるのではないか。私は暗闇のなかで、全く身動きをせず、しばらくの間、じつと耳を澄すことにした。鼠ならば動き出すだろう。だが、いつまで待っても音はしない。つい、うとうと眠りかかると、また枕元に近づいて来る音がして目が覚めた。

このあたり一帯は、昔の墓場であつたらしいと、大分あとで

聞いた。

人魂のこと

どうも、人魂はあるらしい。

飛んでいる人魂をステッキで突いて、その先を触つてみたら冷たかつたという報告が、イギリスの物理学雑誌のフィロソフイカル・マガジンの大変古いところに載っているそうである。これを読んで、しきりに感心している寺田寅彦先生に、弟子の一人が、一体こんなものの何処が面白いのですかと尋ねたら、先生は、これこそ科学者の実証的精神ではないかと申されたという。

私の父は夜更けて帰る坂道で人魂を見た。それは夜空を、波に漂うように揺れ動きながら、道を横切つて、崖の暗闇に消えて行つたそうである。

私は幼い頃、死んだ金魚を、池のほとりの薔薇の根もとに埋めた。それから、しばらく経つた五月雨の降る宵、椽側から暗い庭先を眺めていた母が、小さい声で、あつと言つた。薔薇の根もとから小さな火の玉が出て、一尺程のぼつて、糠雨のなかに消えたという。魚魂という言葉はないので人魂と言わせて貰

う。小指の先ほどの可愛い金魚の人魂は、出た途端に消え失せた。

だが、私は人魂を見たことがない。残念である。

天神山ひよろひよろのこと

幼い頃、お化けの夢に怯えるたびに、「お化けは箱根の山からこつちには居ないんだよ」と母に宥められて安心したが、そうは言っても、お化けの話聞けば矢張り怖い。

当時、私の家は横浜の西戸部町字山王山で、坂道を下りて、伊勢町の交番から左に折れた先が「くらやみ坂」。昔の首斬り場の跡が小さな空地になっていた。左に曲がらずに、かどの焼芋屋のところをまっ直ぐ行くと、御所山や天神山へ行く。御所山は床屋の裏の細い露路を曲った所に、古い小さな五輪塔があり、御所の五郎丸の墓と言ひ伝えられているからである。天神山の由来は知らない。

「くらやみ坂」の御仕置場跡のあたりで、私は年上の子供から恐ろしいお化けの話聞いた。夜になると天神山から「ひよろひよろ」という大変凶悪なお化けが出てくる。それはただ、紐のように長いお化けであって、どんな細い戸の隙間からでも

平気で入ってくるという。

寺島良安著わすところの『和漢三才図会』所載の人魂の図は、恰も電気水母のように、丸い頭を持ち、細長い尾を引いている。ところが「ひよろひよろ」に至っては尾頭も心もとなひ唯ひよろひよろと長いばかりの化け物だから、いっそ気味が悪い。頭がないから、どんな隙間でも平気で這入れるのだから。

私はこの話を聞いてから、日が暮れると、ますます怖くなつた。夕飯の膳に向つても、全くふさぎ込んで、果てはべそをかいた。心配した母に尋ねられて、一部始終を話した途端、父母、兄、姉全部の大笑いとなり、私も毒気を抜かれた形で、不思議と怖くもなくなった。

その後も何ぞといえは「陽ちゃん天神山のひよろひよろ」と、笑い話にされた。

だが、考えてみれば、尻っぼだけの紐みたいなお化けが、蛇のようにぬたくって、空を泳いで来たら、矢張り怖いのではないだろうか。

化け物仕返しのこと

九州の、さて、何処であつたか、菟藪こんじやくのおばけの出る所があ

るそうな。

そんな馬鹿なものがあるものか。第一、蒨蕪とは間が抜けていると、大声で強がりを言つて歩いていたら、突然どこからか、「異ナ事コクキヤア」と破鐘のような大音声と共に、天から数十疊敷もあるうという、べらぼうな大こんにゃくが目の前にぶらさがつた。

化け物が仕返しをしたという話はいろいろあるが、馮大異ほど、ひどい目にあつた男は、まずあるまい。

昔、中国は元の時代、蘇州のあたりに、馮大異という男がいた。当世風に言えは無神論者の偶像破壊主義者で、何かを祭る祠を見るたびに焼き払い、像を沈めた。或る日、たまたま用があつて近くの村へ出かけたが、途中で日が暮れた。その辺は見渡す限りの荒野で、人家もなく、兵乱のあつたあとで、骨や屍体が散らばっている。雲行きが怪しくなつたので、樹の下で休んでいると俄かの吹き降り。雷が鳴ると突然そこいらの屍体が起き上つて走つて来る。慌てて樹に逃げのぼると、屍体は樹の根もとで、摺えろ摺えろと騒ぎまわる。

そのうちに雨がやんで、雲の間から月が出た。すると、大きい青鬼が現れて、屍体を片つぱしから摺えては、瓜でも噛むように食べ尽して寝てしまった。寝ているすきにと、樹を降りて

逃げ出すと、鬼は気が付いて追いかけて来る。命からがら荒れ果てた古寺に逃げ込んだが、そこには本堂に、大きな仏像が一つあるばかり。その背中の穴に飛び込んで、やれ助かつたと思つたら、仏像がげらげらと笑い出し、「思わぬ御馳走が腹に入ったわい」と立ち上つて歩き出した拍子に敷居に躓いて、ばらばらに壊れ、大異はやつと腹から出ることが出来た。

ほうほうの体で寺をとび出すと、遙か彼方に灯が見えた。ほつと安心、駆け寄つて見れば、首のないもの、手のないものなど化け物達の酒盛りの真最中。大異を見付けると「うまい肴がやつて来た」と一齐に立ち上る。仰天して闇雲に逃げ走つたら、底の知れない溜井戸に落つちた。井戸の底には大勢の鬼、化け物共打ち揃い、鬼王を頭に待ち受けていて、今日こそは、この生意気者に仕返しをしてやるぞと、大異を裸にし、石の俎の上のせ、粉を捏ねるように転がせば、身体は延びて、たちまち身の丈三丈余り。竹竿のようにひよろひよろ歩けば鬼どもは手をうって嘩したてる。苦しさに堪え兼ねて、背を低くして呉れと頼めば、また俎の上で捏ねると、今度は一尺ほどに縮まつて、団子のような身体で地べたを蟹のように這いまわる。散々笑いものにした挙句、もとの背丈に戻したが、思い知らせるためとばかりに、鬼共寄つてたかつて、大異の目に青い玉を嵌め、

髪を赤く染め、口に烏天狗のような嘴をくつつけた。

大異はやつと町に帰ったが、逆立つ赤毛に青く光る眼の烏天狗では、町びとは恐れて逃げまわるばかり。憤りの余り、家に閉じ籠って食を断ち、死んで天帝に訴えるとして、自ら命を断つた。

——剪燈新話・太虚司法伝——

こんな念の入った仕返しは、余り類がないだろう。訴えは天帝に聞き届けられ、悪鬼どもは悉く、滅ぼされたということになってはいるが、さて、そうなるは無神論者が勝ったのか負けたのか、私には分らない。

※

(附記) こんにやくのお化けは五十年余りも昔に読んだ事として、九州の何処だか忘れてしまったし、お化けの科白も間違っているようである。識者の御教示を得たい。

剪燈新話もまた五十年余り前に読んだ葵文庫所載の江戸時代の翻訳の記憶による。江戸時代とは言っても、浅井了意の「伽婢子」のような翻案ではなく、直訳体のものであった。今は入

手不可能なので、飯塚氏訳の現代語本で記憶を補った。筋書しか書けなかったが、太虚司法伝は剪燈新話二十篇の説話のなかでも出色のものだと、私は思う。

(明星大学)



わたしのバケモノ



益田 勝実

ひとが亡くなった母の声音をどの時点のなにで記憶しているものか。調査らしい調査があることを聞いていない。だからといって、あの調査統計の表の数字の何百分のひとつに、わたしのそれも化けてしまうだけなら、それもありがたくない。しかし、他人の心の中にあるそれと自分のそれとを比べてみたいような気持ちも
しないではない。

わたしは、母の晩年近く、自分が大陸奥地の戦場から復員してきて、茫然の体で日々を暮らしていたころの、割にふたりだけの時間が多かった日々の、なにからななまでふたりきりの空間でしゃべりあっていたときの、あの声音と、母の子守唄の声とを、もつともよく覚えていて。母とわたしの歴史のアルファとオメガ

にあたる部分だから、当然といえば当然かもしれない。

しかし、子守唄の声は、考えてみるとおかしい。唄で寝せつけられていたころの幼いわたしが、どうしてあれを覚えていのか。ほかのその時期の記憶などはないのに。

ねんねんよう、ねんねんよう。

起きたらゴンゴチーにかぶらせる（食いつかせる、の意。）

ぞう。

ねんねんよう、ねんねんよう。

ずっと離れたオトンボの子だから、弟妹に対する子守唄ではない。母は四十二になってわたしを生んだ。ちいさいときになつた兄姉を入れると、九番目の子のはずである。ふとんを積み重ね

て、それに寄りかかり、坐って生んだのだという。逆児さかごで、仮死の状態まわいで生まれたらしい。だから、おそらく、わたしあたりが、日本のわたちの坐産の歴史の最後に位置するのではなからうか。

それはそれとして、山口県の下関旧市内、わたしの生まれたあたりでは、おそろしいバケモノのことをゴンゴチーといった。もう少し大きくなって、子ども同士でいて、ふいに相手をこわがらせようとするときなど、うしろから幽霊のように両手をブラリとさせて、ゴンゴチーと襲いかかっていくこともした。

ゴンゴチーのオバケがどんなものか、説明してもらったことはないが、わたしは、それを家から少し離れたところにある赭土山あかどのゴンゴジヤマと勝手に重ね合わせて、了解するようになったのではなかったかしらん。よその子は、わたしのゴンゴチーをゴンゴジーということがあったから、後には、そここのの荒涼とした光景と頭のなかでダブっていった。兄についてタコ揚げにいく時節などは、そここにもぎやかで、人のタコこに糸をからませて、(タコ糸にガラスの粉をソックイ糊かで塗りつけてある。)切り合うなど、活気に満ちていたが、ふだん少人数で水晶掘りにいくときなど、人氣がなくて無気味なところだったから、そう感じたのか。戦後は平らにして町(田中町というところだが)のまんまになつてしまった。昭和のはじめだって、そこが金剛寺という廢寺

址で、明治の早いころ監獄のあったところなどということ、町の人たちはほとんど知らなかったが、父が地じつきの人間だから、幼いわたしも知っていて、監獄——ゴンゴウジヤマ——ゴンゴチーの連想の輪をひとりで造りあげていたのかもしれない。

十代の終わりになって、『嬉遊笑覽』を『隨筆大成』本で読み、わたしの母のゴンゴチーが、よそにガゴウシというところもあり、元興寺の鬼の意味だと積たかかれていて、啞然あとした。(その本は夕食代がない日売りにいった。)それで、こんどは、『日本国善悪現報靈異記』を、『日本古典全集』の狩谷掖齋の注で読み、大昔、大和飛鳥の元興寺の鐘堂で、よなよな人をあやめていた幽鬼を道場法師が退治した話を知った。戦後、『全国方言辞典』で、宮崎・鹿児島県で妖怪をガゴといい、徳島県美馬郡でガゴジという、とあるのに接し、柳田国男の『妖怪談義』という本が出て、ガゴゼ(兵庫)、ガンゴ(奈良)、ガンゴジ・ガンゴシ(徳島)、ガンゴ・ガガモ・ガンゴチ(愛媛)、ガンゴジ・ガンゴチ(茨城)、ガンゴジ(栃木)など、各地の同系列の語が列挙してあるのを知ってびっくりした。(「妖怪古意」)

元興寺の鬼は、悪心を抱いていた寺奴の死霊が化けて出たことになつている。柳田さんは、全国のガゴジ系の妖怪名詞がそういう一寺院から出て広く分布していることを、すなおには認めない

立場だった。なにかもつと別のそういう広い分布の基盤となった相型を生みだす、古い共通観念がありはしなかったか、と考えている。

母が、「ねんねんよう、ねんねんよう／起きたらゴンゴチーにかぶらせるぞう」「ねんねんよう、ねんねんよう／泣くとゴンゴチーにかぶらせるぞう」とわたしをたたきつけて寝かそうとしていたとき、どんなバケモノの襲来をイメージしていたか、わたしにわかりようがないが、もう少し大きくなると、わたしのほうで勝手にその内容を想像するようになっていた。

母がくりかえしてくれたチンボクボクドノの昔話に出てくる、あのバケモノたちのようなのがゴンゴチーだろう、と思うようになつていく。昔なんでも、ひとりの旅びとが行き暮れて宿を求めた。村びとは、旅の者を泊めることは御法度だが、バケモノが出ていつも人を食い殺す古寺があるが、そこなら貸す、という。勇氣がある旅びとは寺へいき、須弥壇の下に潜りこんでいた。夜が更けると、なにものかがゴットゴットやってきた。「チンボクボク殿、おいででござるか」「どなたでござるか」「フタバノサンメでござるか」。しばらくして、またやってくる。「チンボクボク殿、

おいででござるか」「どなたでござるか」「イッボンアシノコケコでござるか」。そうして、バケモノが大勢寄ってくる。

話の方は、旅びとは仏を念じていて見つからずすみ、夜が明けて、村びとと見とどけておいたバケモノの行くえを追い、墓原で二齒の三目（古下駄）を、やぶの中で一本脚の古鶏を見つけて……というふうにと退治するが、肝心の寺のぬしチンボクボク殿とは何者かがわからない。

最後に、旅びとはふつと考えついて、やにわに寺の大柱を刀で斬りつける。柱から赤い生き血がタラタラと流れる。大柱はツバキの大木でできていた。それで、バケモノなかまで、「樺木々殿」とあがめられていたのだ。ツバキの木にはそういう霊力があるらしい。愉快なことばの判じものの昔話だが、幼いころのわたしには鬼気迫るものがあつた。特に寺の本堂にバケモノのどの顔もどの顔も、母が少女の日たしかにその眼で見たという、ひげむじやらの大男の顔を想像していた。

わが家は、若いころ壇の浦の海沿いに夜道をもどってきて、道のまんなかには立ちはだかる黒い影の大きなバケモノがこわくて、もとの道を還つて一泊してきたが、あくる朝そこにさしかかると、なんのことはない大きな枯木だった、という体験者の父と、少女の日、バケモノを見とどけて、バケモノの存在を確信してい

る気丈きじょうな母との組み合わせからできていた。父のバケモノ体験談は、いつも、正体はわかればなんでもないが、男たちがふるえ上っていた、というタイプの話。

明治三十年兵の父は、小倉の歩兵十四連隊の一等卒だった。中隊に夜尿症の兵隊がいて、その病癖と未解放部落出身ということとでいじめぬかれ、軍隊生活をうらんで自殺した。霊安室の屍衛兵しかばねに立った連中は、いじめた戦友だから化けて出るぞ出るぞと思つて鉄砲をもつて立っていた。突然、パチンと鋭い物音、衛兵はみんなワァーッと大声を立てて、外へ逃げ出した。火鉢の炭がはねたのだった。まあ、そういう系統の話が多い。

しかし、裏町という繁華な芸者まちの鳥屋に日が暮れてかしわを買いにいくと、「もうおしまいです。あした来てください」という返事がある。人はだれもいない。調理台の下の鶏が一晩生きながらえたくて、人間の声づくろいをしてそういうのだ、という話など、そこへ鶏肉を買いにやらされるたびに思い出して、気味悪かった。鳥だって、少しでも生きのびたいだろう。発想が真に迫っている。

母の方は、明治十一年生まれだが、萩から一時岩国へ移り住んでいた。岩国の城山近くの空屋敷を借り、離れは漬物置場にしていた、という。まだ五つ六つの少女だった母が、ある日のお茶の

時刻に、オテショウ（小皿）と箸をもつて味噌漬を取りにやらされた。薄暗いその部屋で、樽の中をかきまわしていたとき、膝もとでコトコトと小さい音がした。鼠かと思っていると、コトコトはしだいに大きくゴトゴトとなり、音がだんだん畳の上をはつて向こうの壁の方へ動く。恐しくなつて行くえを見守った。音が壁へとどくと同時に、大きなひげむじやらの男の顔が壁いっぱいに浮かび上った。その時は声が出ず、男の顔が消えたとたんに、ワァーッと大声をあげた、という。

母屋から祖父が廊下を馳けつけたとき、昼なのにちようちんに火をともし下げてきた、というのが、何度聞いても印象的だった。維新前に、その屋敷の主人が、仲間ちゆうげんに髪をゆわせながら、ああでない、こうでないとか叱りつづけた。叱られながら仲間は頭上でアッカンベと舌を出した。それが主人の手鏡に映った。シトシト雨のクレナイ（紅草）の畑に引き出され、打ち首にされた。そういういわくのある屋敷だ、とあとでわかったそうなる。

でも、バケモノより幼いころこわかったのは、子盗り。これは実在すると信じて疑わなかった。現に連れていかれた子どもたちが曲馬団にいるではないか、とくりかえしていわれていたから。あれは今の若い娘さんにとっての妖怪チカンのごとく、わたしにとって、敵然と存在していたおそるべきものだった。（法政大学）

幽霊と人魂



秋山さと子

墓地に囲まれ、寺の境内に住んで五十余年、残念ながら、いまだに幽霊を見たことがない。しかし、考えてみると日本の幽霊は、人知れず旅先で死んで誰にも葬ってもらえなかったり、恨みをもったまま、いつまでも安住の地を得られない亡者たちのことで、寺には無縁塚もあり、いつもお経があげられているから、幽霊が出る余地がないのかもしれない。

『聊齋志異』などによると、中国の幽霊はなかなか優雅で、縁談をとりもったり、楽器を弾いたりする。菊や牡丹などの植物の精や、狐やすっぽんなどの動物の精、仙女、神女などもいて、生

きている人にとりついて悪いこともするけれど、恩返しもするし、人情味があつて、こんな幽霊なら、一度出合ってみたいような気がする。寺に育つたりすると、妖怪のようなものはあまりこわくなくて、夜間に墓地を歩いても、別に淋しいとも思わないけれど、この頃では、幽鬼や亡者たちよりも、かえって生きている人たちが理由もなく乱暴をしたり、人を傷つけたりするので、そのほうがずっとこわい。

幽霊は見たことがないけれど、いわゆる人魂は、小さい時にごうも見たことがあるような気がする。しかし、それもあんまりこ

わい感じではなくて、ただ、不思議なものを見たという思いが強
い。多分、五、六歳頃のことだったと思う。寺を囲んでいる墓地
は、いつも私のよい遊び場で、家に客人があつてなかなか夕食の
仕度ができないような時には、いつまでも石塔の間を駆けまわつ
て時を過ぎたものだった。いくらか雨模様のある夕方、服が濡れ
て寒くなってきたので、家に入ろうと裏木戸のところまでく
ると、墓地の上に青白く光る丸いものが浮かんでいた。お月様にし
ては低く、二メートル位先に浮かんでいるような感じだった。な
んだらうと思つて目を凝らすと、つ、つと動いて、少し尾を
ひいたように見えた。なんだかわからないけれども気味の悪い感
じで、あわてて家に入つて、その頃は太勢いたじいやや、ねえや
や、書生たちに報告したけれど、皆、「ああ、そりゃ人魂だよ」
と言つて、笑つてとりあつてくれなかつた。しかし、その頃か
ら、埋葬されたばかりの新亡の墓には燐がもえるとか、幽霊や人
魂が生きている人にとりつく話などを聞かされて、いくらか、お
化けがこわくなつたような気がする。

当時は、浅草に花屋敷という子どもの遊園地があつて、メリー
ゴーランドや、人形芝居の小屋があつたりした。そして夏になる
と、よくお化け大会をやつていた。人形芝居では、たしか、杜子
春の話で、地獄の光景を見たように思うけれども、どういふわけ

か、これがちつともこわくなくて、むしろおかしかつた。両国の
国技館でも、夏のお化け屋敷や、秋の菊人形の催しがあつたよう
に思う。こんな時には、誰よりも仲の良かったじいや、といつて
も、本当はまだ年が若くて、じいや代りに墓地の雑用などをして
くれていた青年であるが、そのじいやが連れていつてくれた。
『壇の浦の舟幽霊』などという題がついていて、お坊さんがお袈
裟をかけてお経を読んでいる。やがて、どろどろと、低い太鼓の
音がして、「さあ、出るぞ！」という時になると、じいやが、「き
やうつ、こわい。早く逃げよう」といって、私をおぶつてさつさ
と先に進んでしまうので、実は、こういう作りものの幽霊もあま
り見たことがない。しかし、その頃はまだ、人の背中におぶさつ
ても、そんな不自然ではない年齢であつたのに、断片的とはい
え、よくこんなことまで覚えているものと思う。他のことはもう
すっかり忘れてしまつてしまつているけれど、子どもにとつて、お化けの
イメージ、私にとつてはまだ見たことのないお化けのイメージで
はあるけれど、お化けや、少くともお化け屋敷のイメージは、強
烈なものがあるのだから。ちょうど菊人形の展示のように、舞台
のようになつていて、ろうそくの光りでお坊さんの姿だけが浮き
あがつて見え、全体に夏の宵のように濃紺の、おそらく布かなに
かで作られている海が揺れていた。波がしらがちらちらと光つ

て、そこから何が出てくるのか、今でもその時の、見たかったような、見なくてよかったような期待と不安をはらんだ気持を忘れることができない。

幽霊はともかくとして、人魂のほうはずいぶん見た覚えのある人が多いらしい。東京の下町に育った私の母は、まだ娘の頃にやはり、ごみごみと商家の立並ぶ軒先のすぐ上に、青白く丸い光るものを見たという。月かと思っていると、それがすーっと動いたので、あわてて傍にいた祖母に教えたが、二人がふり返って眺めた時には、もうその光りは消えていたそうである。今なら、UFOを見た体験のうちに入るかもしれない。しかし、翌日その近くで、人が死んだ話を聞いたそうである。

日本では一般に、死者の霊はタマとよばれ、それは人間の身体に住んで生命と力を授けるだけではなく、たとえば、木に住むものはコダマ、ある種の音や言葉に住むものはコトダマといつて、特別の呪力をもつものと考えられていた。しかし、それが住んでる器から一度逃げだしてしまふと、もう捕えることができなくて、その人間や木や、音さえも生気を失ない、枯死してしまふ。

たとえば、古代では、タマシヅメやタマフリの儀礼などがあり、病人の身体からタマが離れてさまよい出すのを防いだり、あまりよく働かないタマを、タマが住んでいると信じられているものを揺すったり、振ったりして、その力をかき立て、人間に乗り移らせるようにしたのである。

日本の幽霊は、白装束や、足のない形であらわれることが多いけれど、時には、本当にタマ、つまり円形であらわれることもあるようで、ある行者によれば、人間の形であらわれるのは、まだ怨念のこもった幽霊であつて、救いに近づくと、輝やく球体に近くなるという。また、生きているうちにも、いわゆる外在する魂——アルテア・アニマ——として、普通は認識不可能であるけれども、なにかの折に見ることができるとも考えられている。

『日本書紀』には、大國主命が海上をただよつてきた自分自身の魂と対話し、それが彼のさまよえる霊であつて、福運であることを知つたという有名な話がある。

こうなると、幽霊の話もだんだんユングの元型論に近くなる。たとえば、中国に女の幽霊の話が多いのも、たいていは勉強ばか

りしている学者の卵たちが書き記したもので、男性の心の中で抑圧されている女らしき、つまりユングのいうアニマのイメージが、日頃、ちっともかまってもらえないことを恨みに思っており、それがかまわれなかったのかもしれない。面白いことに、これらの幽霊は、あんまりこわがらないで、楽しく対話を交すと、そんなに悪いことはないで、かえっていろいろと役に立ってくれるようである。さらに、人間の形から進んで、もっと奥深いところから出てくるように思えるものは、円形、または球体であられるというのも、ユングのいう心の奥底にあって、意識も無意識も含めた心全体であり、そのバランスをとる役割ももっているというセルフと、そのイメージであるマンダラの図形に似ているような気がする。ユングはこのようなイメージがあらわれた時には、うまくそれと対話をかわすことで、危機的な状態から逃れたり、また、自分の人格を掘り下げることができると考えていた。

娘時代の母が見た人魂も、子どもの頃に私が見たものも、なにかそんな意味を持つ自分自身の心理的なものの投影であったと考えてもよいのかもしれない。そう考えると、幽霊も人魂も、心理的錯覚のせいになってしまっただけで、しかも、一方では、そのようなイメージが、未開部族を含めて、世界のあらゆるところで見られるという事実は、形もなにもないように思われている

魂の实在の証明のようでもある。たとえば、私の祖母は、やはり娘の頃に親類のものが危篤だというので、いそいでその家にかかけようとした時に、川端で渡船を待っていたら、光り輝やく球体が、向うからふわとやってきて、目の前でふっと消えたという。やっと川を渡ってその家に着いた時には、もうその人は死んでいて間に合わなかったそうである。こんな話を聞くと、どうも私たちの心の中には、幽霊や人魂がほんとうに住んでいて、なにかの時には抜け出して、目に見えることもあると考えたほうが面白いような気がする。

幽霊や人魂が川や海などの水辺にあらわれることが多いのも、ユング心理学で、水は無意識の象徴であると考えていることと関係があるかもしれない。人間の魂というものが、ほんとうはどこにあるものか知らないけれど、その物理的な証明はともかくとして、女性や妖怪や輝やくタマのような形をとって、心の中でうろたうろしながら出口を探しているのかなと思うと、楽しくなってくる。

子どもとおばけ



坂上明子

「この中におばけいるかなあ」「靴があるね」玄關のガラス戸から中を覗きこんでいることは、園庭同様に遊んでもいいことになっている。袋小路の一番奥の空き家です。

いつ頃から空き家になったのか記憶に定かではありませんが、現在、がらんとした家の中はほこりだらけで、なぜか玄關に靴があり、ガラス戸にはひびが入っています。空き家の前に立っている樺の木には春になると毛虫がたくさん現われます。子ども達の帰った後、退治するのですが、一番先に見つけるのはいつも子ども達です。

ガラス戸のひびが何とも言えず薄気味悪さを増しているのですが、実はこのひび、三年前のある日、おばけがいるかいないか確かめようということになった年長男児が空き家に向かって石を投げているうちに入ってしまったものなのです。

「おばけ出てこい！」と叫ぶ子ども達にとって、この空き家は大変興味のある場所なのです。

六月中旬のある日、私はおばけのお母さんになりました。我が

◇園長室の窓から◇

保育を考える

松島 ち津

私は担任をしていない先生方が、ドッジボールや、巧技台の
枠ぐりなどで、子どもと一緒に遊んでいる様子を見る
と、その若さや活力に羨望の気持を抱いたりすることがある。

又「靴をへだてて痒きをかく」もどかしさの思いをすることも
あるが、情熱をこめて子どもと取り組んでいる先生方に朝夕接
していると、自分の若い頃が思い出されてくる。

或る日担任がお休みということになれば、補教という立場で
直接子どもに接する機会が出来る。こんな時は、これぞ好機到
来とばかり意気込んで子どもの部屋へ出かけて行く。

「センセイ、ドウシタノ？」

「センセイ、オヤスミ？」

（この私だって先生なのに、とひとり言は胸にしまって、な
るべくあっさりと）

「〇〇先生は、今日風邪をひいておやすみよ」

「だから、今日は園長先生が〇組の先生よ」

とたんに、ガツカリしたような顔、顔。

「フウン」と不承不承。

「園長先生と遊んでくれる？」と私。

「イイヨ」（まあしょうがないやという顔）

こんな状態で一日が始まる。絶好のチャンスと意気込んで
見ても、よく考えて見れば休んだ先生には、担任としての週
の流れの計画がある筈、指導の意図がこわれる結果になってはと

考えると、(この一日、一人もけがをしないで遊ばせれば)と初めのハッスル振りは、どこへやらという始末となる。

さて、園の先生方と子どもとの生活を見て、私なりに考えていることをまとめて見た。

一、子どもの生活は遊びである

幼稚園の教育的な配慮のもとに設定された環境の中で、思い切り自分を出して遊ぶ子ども、なかには友だちの遊ぶ様子をジッと見ている子どももいる。そんな子どもでも、とにかく幼稚園に来る。門で迎える私に、目が合うと小さい声でオハヨウ、ザイマスと言いながら。登園した時点では、幼稚園に来ることに楽しみを持ち、この子どもなりの期待をもって来る。この期待に応える為に、保育に当る私達は、ひとりひとりが自分を発揮できるような場を考え、様々な工夫をする。今日は何をして遊ぼうか。〇〇くんは来ているかな? 遊びたい遊具が使えるかしら等と、遊ぶことを考えている子ども。幼稚園では遊ぶことが全部の生活であると言っても過言ではない。子どもからは遊ぶことを切り離せない。遊ぶ事が目的である。遊ぶ中で学びとっていくもの、それが子どもの身につけて、積み重ねられ、

その子どもを造り上げていく。だからこそ、自分で遊べる子どもになって欲しいのである。

二、遊びの成り立ち

子どもが遊ぶ事を見つけて遊び始める時、先ず興味をもち、やって見たい、やって見ようとなる。やって見たいと思い、自分にとって新鮮な事には、好奇心や探求心が湧く、やっている過程で面白くなり、気づいたりして更に興味が深くなり、いつまでも続いて、繰り返して遊ぶ。気づいたり発見したりすることは学習である。

或る日の子どもの活動から拾ってみた。

。四歳児の部屋の中で

十月の此の頃、年少児もダンボールの空箱を使い始めた。

M君がみかんの空箱を相手にしきりに動いている。始めは先ず箱の中に入ってしゃがんでみる。次に仰向きになってスッポリ入ってしまう。まるでお風呂に入っている様である。

「お風呂みたいネ」と声をかけたが、返事はしない。暫らく入っていたが、箱から出ると、箱を逆さまにして、頭からか

ぶつてみる。しゃがんで体を全部入れようとする。頭と手は入るが足が出てしまう。足から入れると手が出る。そこで箱を横に向けて、体を入れ、そのまま箱ごとゴロリと向きを替えようとするが、ちょっとのことで、はみ出てしまう。はみ出たところで箱は被ったまま床とのすき間から外の様子を眺める。可愛いやらおかしいやら危く吹き出しそうになってしまう。本人は至極真面目で、そのままカタツムリのようにゴソゴソその辺を這い廻ると、少々疲れたらしく、突然立ち上って手足を延して終り。

終始見ていた私は、全く感心して了った。ダンボールの空箱を相手に約十五分間、この子どもなりに、体を動かし、自分の思う方向に到達しようためし、工夫し、ひたすら学習の態度である。たまたま取り組んだ、ダンボールという素材は、子どもの無限の可能性をうけとめ、意欲を促し、創造性を高めるのに適切であったことも、遊びを引き出す媒介となつて生きたと言えよう。

このように、能力や、発達の段階の違いや、イメージによつて、変化する可能性のある素材であることが、期待に応えて遊びを引き出す為に必要であると思う。此の場合は全くのひとり遊びで終つた。

。二人の遊びの例

ホールをいっぱい遊園地ごっこが展開されている。巧技台も大型積木もマットも総動員、フト見ると、S君とO君と二人がコーナーで何か二人だけで始めている。大型積木の立方体を二個並べて長方体になっている。一方の端にO君がもう一個つなく、S君は三角を置いた。これで三個繋いだ右端は斜面となった。O君は左端から上つてトントンと上を歩いて右端まで来た。足が滑って尻もちをつきそうになり、ツルリと滑つてストンと床に落ちた拍子にキャットとよるこぶ。足が滑った時はちょっとびっくりした様子だったけれど滑り台のようにお尻が滑ったので、面白くなった。一つの発見である。見ていたS君は、自分もトントンと渡つて来て、わざと落ちる真似をして、ツルリと滑つて、床にドシン、キャット、「コンド、ボク」O君は、持って来た三角一個を左端に置くと、「トントントン」と弾みをつけて歩いて来ると、「ストーン」「ドシン」「キャット」「ハッハッハッ」もう面白くてたまらない様子。

一辺が四十五cmの積木の斜面だから、するつと滑つてもすぐ、ストン、ドシンなのだが、このリズムを発見した面白さ、自分から面白がつているこの二人。遊びそのものは単純でも

トントントン ストン ドシン キャッ このリズムを生み出した。見事に遊びをつくり出し、面白くし、自分達で楽しい雰囲気を作り上げているわけである。子どもは立派な演出家であると心から感じた。

この場合、このように面白く遊びにのることが出来たのは、S君、O君の二人の人間関係が、ピッタリと安定していることが基になっている。

この二つの例は、前者の遊びは、全くの一人遊びが、素材の適切さで、面白さが深まり、遊びがつくられていった例で、後者は、人と人との関係の安定さが、遊びを成立させた例である、どちらにも保育者は子どもの前には居ない。背後に在って、適切な素材をさりげなく出すことによって、又友だちの結び付きを育てることによって、指導者としての役割りを果たしていたと言える。

三、幼児の教育は

子どもは、おとなになる為に幼児期があるのではない。子どもは、子どもそのものであって、此の社会の中の一員であり、一人の人格を持った人間であると考える。永い人生の一時期

を、四歳児は四歳児なりに、五歳児なら五歳児として、かけがえのないその時を、最高に充実した、最高に楽しい生活を過ごすことであると先ず考えたい。

ならば、幼児の教育は何をするのか、それはおとなが、自分に都合の良い子どもの将来の姿を予想して、型をきめ、無理にはめ込むような教育ではない。毎日の子どもの生活を大切にするならば、子どもが持っている様々の能力を遊びの中でいかし、遊びをもっともっと面白く、楽しくする方向に伸すことであると思う。面白く楽しくは、ただおもしろおかしい事ではなく、友だちと触れ合う中で、前記にあるような遊び方のくふうや、新しいルールを生み出し、次から次へと発展していく、子どもなりの自主性や、創造性がその中で発揮できるように遊ばされるのではなく、自分から遊べる子どもであり遊びの中に没頭する子どもであること。

特にひとり遊びから始まる幼児の遊びを、友だちと居る楽しさ、友だちと共に喜ぶ共感の気持や、助け合う心情、役割りを分担して遊ぶ事から、友だち意識や、連帯意識を育てたいし、又育てなければならぬと思う。

このことは、前にも書いたように、一人の人間として、認め

られることであり、将来自分の生活を創造し、ひいては次の時代をつくり上げる事につながると思うのである。

四、保育者としては

。信頼をもつ

「先生、今頃何してるかな」

私の尊敬する先生のお嬢さんが、日曜日の一家団らんの夕食の席で思わず口にした言葉、もう中学生なのだけけれど。

父上である先生は、つくづくと次のように言われた。「僕は、受持ちの先生の立派さが本当にわかった、こんな先生に教育を受ける娘は幸だ。教育に当るものは皆、このような先生であって欲しい」と。

幼稚園でも同じような事があつた。

受持ちのおかあさんからこんな事を言われましたと、或る時担任から聞いた話は、

「先生と結婚する、と言いき張って、七五三のお祝いの服を出してと聞かないんですよ」と。

可愛いと思うと同時に、ここまでの信頼関係を得ている先生という存在にまたまた感じ入ってしまった。子どもは先生

に絶対の信頼を抱いている。子どもにとって先生は、人的環境の中の一つであるなどという以前の関係であると考えなければならぬ。

どうしてかな、という関心や、疑問を持つ事は、思考力を深め、経験の幅を拡げることになる。子どもの前だからと言って、格好をつけずに、「どうしてかしら」とわからない様子を見せ、後で考えたり、工夫したり、試したりする姿を見せる、と言う先生もある。

これは、問題意識を持つように仕向ける一つの手だてとしてだけでなく、もう一つの考え方の「先生もわからない事がある」だから僕達と一緒にやってみるんだナ、同じなんだ、という親近感や一体感を持つようになる。そして子どもとの人間関係が又しつかり結ばれる、と此の様に考えたい。

。子どもの期待に応える

子どもが先生に対して、絶対無二の対象と感ずるのは、おもしろいことをさせてくれる

遊んでくれる

親切

やさしい

いろいろ教えてくれる

助けてくれる

何をして上手である

叱るけれど 好き、等等

というように子どもなりに先生に期待しているかけがえのない人なのである。教師自身、子どもの声を、話を聞いてこれに応えなければならぬ。応え方はいろいろあるだろう。相手の子どもによっても違うし、時と場合による事勿論である。

言葉で答える

目だけで答える

子どもと同じ状態になる

肩に触れたり、手を握ってあげたり、体で応える。

同じ気持ちになる事も応える一つであろう。例えば、怪我をした時「痛かったのネ、先生もけがした事あるのよ、痛くて泣いちゃったの」等と言うと、子どもは、先生も泣く事あるのかと思いい体感を持って安心する。

。もう一つ、是非教師として心がけてほしいのは父母との関係である。

父母への理解や信頼の為には常に連絡を密にする事は勿論であるが、教師側の意識としてどうあるべきか。教師の目は常にひたすら子どもに向いていなければならない。その子どもとの背景に父母がいると思う事である。つまり保育者と子どもとの線上に父母がある、線から外れて父母がいるのではない、線上にあればまぎれもなく、保育者そのものすべてが、子どもに向っている。線から外れた見方をすれば、子どもに向うべき心も目もその分だけマイナスになるのだから。

画家はカンバスに自分を表現する。

我々教育者は、子どもに教師自身を染めていく、

そこに信頼関係がなくて、何があるのか。

終りに、

保育というこの道

無限の可能性を持つ、この子ども達と

共にあることに、よろこびを持って、ひたすら進みたいと思ふ。
(東京・文京区立後楽幼稚園)

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——(その十)

海老沢 敏

八、讚美歌としての《ルソーの夢》(承前)

トマス・ウォーカーが《リボン博士の讚美歌集》の《統篇》の中に、第二六五曲として収めた讚美歌としての《ルソーの夢》は、その後、讚美歌の節としてひろく歌われていったことは事実である。

まずはじめに、マクネヤ^(注1)別所梅之助共著《改訂讚美歌物語》(昭和八年、画版昭和十三年)の一節を引用してみよう。

「フォーセットのこの三首のうち、第二の歌即ちへ主のしめし

により あたへられし」(讚美歌一六六)の譜 Beathudo はダイクス博士(第四篇参照)の作で、第三のへかみのめぐみを われらにそそぎ」(讚美歌五二)の譜は明治三十六年版(さんびか)では仏国哲人ルッソ(Jean Jacques Rousseau 一七一—一七七八)のであったが、新《讚美歌》の方では、ウェイド(J. Wade 18th Century)の Holywood の譜を使用してゐる。第一の歌へかみによりて いづくしめる」(讚美歌四〇三)の歌にはそれぞれ国籍を異にしてゐる三人の作曲者がある。「中略」しかしこの人々のうちで最も著名なるは、ルッソである。彼はジュネーヴで生れた故、表面は瑞西人であるが、一生仏国のために身をゆだねた。彼は仏国革命前の半世紀に於て、詩人的哲学者、さては宗教

問題の論客としての活動範囲は、決して仏国帝国内に限られなかった。音楽の見地より言へば、彼は時に作曲し、殊にその音楽辞典は著名である。彼の筆になったもののうち、一つの歌劇がある。一七五二年初めて世に出た“Le Devin du Village”（村の占者）と名づけたものである。この中のメロディーから Greenville という譜が出たのである。独逸の作曲者、クラムメル（Johann Baptist Cramer 一七七一—一八五八）が一八一八年にこのメロディーより一つのピアノ曲を作り、又それが形式を変じて、一つの讚美歌の曲として、一八二五年の頃より、歌はるることになった。即ちこの年に、リップトン John Rippon 博士が編纂した歌集の附録として、初めて英国の社会に出たのであった」（三九七ページ—三九九ページ）

（注一） この書物の原名は以下の通りである。

《Rev. Theodor M. MacNair, M.A.: Familiar Hymns; Their Authors and Composers. with a preface by Rev. Hironichi Kozaki and an Introduction and an Appendix by Rev. Ume nosuke Bessho》（Keiseisha, Tokyo, 1917）この書物は宣教師として長く日本で伝道活動を続け、かつ明治学院教授をつとめたセオドア・モンロー・マクネアが著わしたものであり、大正六年に警醒社から出版されたものである。その訳者は儘

田卓一、田中儀三郎、原口愛子であったが、この改訂版の編集は喜多村道がおこなっている。

このマクネアの記述では、ジョン・フォーセット（一七三九—一八一七）なる牧師が作った讚美歌の歌詞《かみのめぐみをわれらにそそぎ》がつけられた《譜》、すなわち楽曲、いわゆる《グリーンヴィル Greenville》の作者をルソーとして説明しているものである。この《グリーンヴィル》は《明治三十六年版の《さんびかに》》収載されているものであるが、多少の相異はあれ、いわゆる《ルソーの夢》の旋律である。その旋律がルソーの《村の占師》の中に含まれていること、クラマーが一八一八年（一）にこのメロディーにもとづいてピアノ曲を作曲したこと、それから讚美歌が生み出されたこと、それが一八二五ごろからであり、リップトン博士編集の讚美歌集の附録ではじめて英国に紹介されたことなどが主旨であるが、《ルソーの夢》のタイトルについて触れられていないことと、クラマーの曲が一八一八年作曲とされていることをのぞけば、《グロウヴ音楽辞典》の第二版の記述と共通している。という点で、マクネアが、他の讚美歌解説書等の文献とともに《グロウヴ》を参照したことが窺えるのである。このマクネアの著作に先立って、ジョン・フォーセットについ

て解説し、かつフォーセット作の詩《神よみめぐみ》について触れ、かつ、その歌詞につけられた曲について説明している日本語の文献がある。海老沢亮編著、松本起増補《讚美歌歴史》（明治四十三年、画版大正二年）がそれである。作曲者に関する記述を抜き出してみよう。

「此譜クリーンビル〔原文のまま〕はジーン、ルッソーの作であつて、最も能く知れ渡つてゐるもの一つである。彼は偏僻の天才ともいふべき自由思想家であつた。此譜は素と千七百五十二年頃楽劇の爲めに作られたものであつて、『淋しく悲しき不在の日や』といふ恋歌である。之が多年の後『ルッソーの夢』として知らるるに至つた。併し此不信仰なる哲学者たり音楽者たりまた誤てる道徳家たりしルッソーが、此有名な譜を作つたとは、彼自身予期せぬ處であつたらう。彼が夢に聴いた處（伝説に依ればそれは天使の歌であつたといふが）を、此音楽に現はし、以て彼が嫌忌した教会に親しき歌を与へ基督教界をして此の誤てる教師に對して其感情を和らげしめたのである。彼は千七百一十二年ゼンバに生れた。併し彼は曾て母の愛情を知らず、父の同情や教訓を味つた事もなく、さりとてまた此子供の教養を請合ふ様な親戚の同情を受けた事もなかつた。此等は彼の性格に必然現はれた處であ

る。千七百七十八年七月に歿した。世の凡ての人は彼が書きし全体を喜んで忘るるであらうけれども、此譜は今尚生きてゐる。基督教国にては童子も尚能く此歌を知ると云ふとて強ち誇大ではあるまいと思はれる。」（一六六ページ—一六七ページ）

この説明文とりわけて興味ぶかい点は、第一に二十世紀初頭あるいは十九世紀末から）のキリスト教界のルッソーの人ならびに思想に対する否定的な態度であらう。ここで著者はルッソーの反教會的態度を批判、弾劾しつつも、そのルッソーがこの「有名な譜」によつて、みずからの意図に反して、キリスト教会のために、忘れがたい寄与を果している点を評価しているのである。これはおそらくは著者自身のルッソー観でもあつたらうが、その背景には当然この時期の英国をはじめとする英語圏のキリスト教会におけるアンティ・ルッソーの考えが透いてみえるのである。

しかしながら、この論稿の枠内でのこの説明文の重要な点はむしろ次の三点といつてよいだらう。ひとつは「此譜は素と千七百五十二年頃楽劇の爲めに作られたものであつて、《淋しく悲しき不在の日や》といふ恋歌である」という記述とそれにつづく「之が多年の後『ルッソーの夢』として知らるるに至つた」という説明。そして第三に「彼が夢に聴いた處（伝説に依ればそれは天使

の歌であったといふが、を、此音楽に現はし」という記述である。

第一点はルソーの《村の占師》に原曲があること、そしてそれが《淋しく悲しき不在の日や》なる恋歌であるということであるが、この《恋歌》については後に述べることになるだろう。

第二点についてはクラマーの名前はないが、《多年の後》、ルソーの原曲がルソーの夢として知られることになった経緯を物語っている。そして第三点はルソーが夢の中で聴いたメロディーをこの曲としたこと、しかもそれは《天使の歌》であったことである。

私たちは、ここではやくもあの二つの歌曲《メリッサ》とそして《ルソーの新ロマンス》のことを思い起さずにはいられないのである。ひとつは美しい乙女メリッサが去っていったことを嘆く悲しみの歌であり、もうひとつはほかならぬ幸福の島での夢の歌だからである。それが作者が夢で聴いた天使の歌というようにキリスト教的な解釈が加えられているのである。淋しく悲しい不在の歌については前述のようにやがて後に立ち戻ってくることにして、まず天使の歌という解釈について論じてみることにしよう。

フランク・ジョンソン・メトカーフの《讚美歌物語》(注2) (一九二八

年)には《グリーンヴィル》(ジャン・ジャック・ルソー作曲)

の説明に次のような記述がみられる。「言い伝えではこのフランス作曲家がある日眠り込み、自分が天に連れられて行き、そこで神の天使たちが玉座の廻りに立っているさまを見、また彼らがこの節を歌っているのを聴いた夢を見たという。目覚めるやいなや、彼はこの節を書き下ろしたが、そのためにこの曲はまさに《ルソーの夢》と呼ばれてしかるべきなのである。」(八一ページ)

(注2) Frank Johnson Metcalf 《Stories of Hymn Tunes》
(New York, 1928.)

クラマーがそのピアノ変奏曲の主題を創作した時、それに《ルソーの夢》とタイトルを附したのは、すでに論じたように、《ルソーの新ロマンス》のテキストを知っていたからであろう。ところが、この讚美歌としての《ルソーの夢》、すなわち《グリーンヴィル》については、このタイトル《ルソーの夢》が、クラマーが意図した《ルソーの新ロマンス》による夢というタイトルの変奏主題》という意味から、《作曲者ルソーが夢みた夢の曲》へと変えられているのである。すなわちルソーが夢の中で恋人を夢みる内容で作ったものと考えた曲を変奏主題に変えて編作し、それに《夢》というタイトルを附したという意味、言い換えれば《ルソー原作クラマー編作変奏主題《夢》》から、《ルソー自身

が夢の中で靈感を与えられて作曲した曲、つまり、しばしば他の作曲家でもエピソード風に伝えられることがあることであるが（たとえバタレイニ、ペルリオーズなど）、夢の中で旋律を聴き、それを目覚めてから書き下ろして、名曲を得るといふ物語に変容してしまっているのである。その上で、それが讚美歌の旋律の着想、あるいは創作にふさわしく、ルソーが夢の中で、天使たちの歌を聴き、それをあとで書き写したというキリスト教的な、讚美歌にふさわしい筋書へと変身させられているのだ。

キリスト教の立場からは、プロテスタント（カルヴァン派）からカトリック、そしてまたプロテスタントへと信仰を軽々しく変えて恥じない変節者、〈不信仰なる哲学者〉にして〈誤てる道徳者〉、〈誤てる教師〉であるルソー、「プロテスタントとして教育を受けたが、後年自然神教（デイズト）となった」（メトカーフ）ルソーが、キリスト教界に対して果たしたまさに唯一の貢献として記憶されていた感がある。

そうしたキリスト教界のルソーに対する態度、讚美歌の世界でのこの《ルソーの夢》に対する解釈は忖措こう。既に引用したメトカーフの書物は《グリーンヴィル》について、まず次のような説明をおこなっているのである。この《グリーンヴィル》の旋律は、ルソーのオペラ《村の占師》から採られたが、一七五二年十

月十八日にフォンテーヌブローでフランス国王の前で初演されたこの作品はその後たえず舞台にかけられ、七十五年間もそうしたかたがが続いたあと、やがて上演されることが少なくなっていた。「讚美歌の節として一番最初にあらわれたのは、一八二三年に印刷された《教会音楽のヘンデル・ハイドン・コレクション》の第二版と思われるが、ここでは《グリーンヴィル》と呼ばれている。英国ではコッテリルの《キリスト教讚美歌集》（一八三一年）に見出されるが、《聖体拝受》（ホスト・レセプション）の名がついている。《聖歌集》（サングブック）（一八四三年）では《ルソー》と呼ばれ、他のいくつかの歌集では《ルソーの夢》と呼ばれている。」（八一ページ）

この記述によると《グリーンヴィル》の旋律が讚美歌としてはじめて現われたのが一八二三年と推定されているが、じっさいには一八一〇年代であることは、すでに述べたことから明らかである。だが、一八二〇年代に入ると、この曲が《グリーンヴィル》と呼ばれることになったという指摘は、この旋律が一般にひろく知られるようになった事実を物語っている。なぜなら、ポピュラーな讚美歌の節は、《エセックス》、《リージェント・スクエア》、《エディンバラ》、《リスボン》、《ゴータ》、《デュッセルドルフ》といった都市、町などの名で通称されることが多く、記号としてのこれらの名前を聴けば、ただちに旋律が思い浮ぶものであ

ったからである。

以下、讚美歌集にみられるこの曲をタイトルともどもいくつか紹介してみることにしよう。

ひとつは《グリーンヴィル》が左側に、そして《J・J・ルソール》が右側に指示されている例である(譜例①)。ちなみにこの讚美歌集では曲譜と歌詞は別になっている。

▼ 譜例 ①

GREENVILLE. 8^s and 7^s. 8 lines. J. J. ROUSSEAU, 1775. *Fine.*

D.C.

The Church of Christ. 373

487 SAVIOUR, visit Thy plantation; 2 Let our mutual love be fervent,
Grant us, Lord, a gracious rain! Make us prevalent in prayers;
All will come to desolation. Let each one esteemed Thy servant
Unless Thou return again. Shun the world's bewitching snares.
Keep no longer at a distance; Break the tempter's fatal power;
Shine upon us from on high; Turn the stony heart to flesh;
Lest, for want of Thine assistance, And begin from this good hour
Every plant should droop and die. To revive Thy work afresh.

John Newton, 1779.

▼ 譜例 ②

CLOSE OF WORSHIP. 10
GREENVILLE. 8s, 7s & 4s. Jean Jacques Rousseau. 1750. *Fine.*

D.C.

1. Lord, dis-miss us with thy blessing; Fill our hearts with joy and peace:
D. C. O., re-fresh us, O, re-fresh us, Trav-eling thro' this wil-der-ness.

Let us each, thy love pos-seas-ing, Tri-umph in re-deem-ing grace;

つづく譜例②も同様の例であるが、歌詞、作曲年代(?)に相異なる。^(注4)

第三例は《グリーンヴィル》のタイトルだけ示されている例である(譜例③)。^(注5)

第四例は《ルソー》とのみ記されている例である(譜例④)。^(注5) この譜には右側に《フランス歌曲》と記されている。

▼ 譜 例 ③

6

SABBATH AND SANCTUARY.

GREENVILLE. 8s & 7s. DOUBLE.

Musical score for 'GREENVILLE. 8s & 7s. DOUBLE.' consisting of two systems of two staves each. The top staff of each system is in treble clef and the bottom staff is in bass clef. The music is in 4/4 time and features a melody in the upper voice with a supporting bass line.

▼ 譜 例 ④

ROUSSEAU. 6. 8's. or L. M.

French Air.

Musical score for 'ROUSSEAU. 6. 8's. or L. M. French Air.' consisting of three staves of music in treble clef. The music is in 6/8 time and features a simple melody. The lyrics are written below the notes.

Our God is good, and he is great, A - round his throne the an - gels wait;
 He made the sun with beams so bright, He made the moon which shines by night,
 The glitter-ing skies that look so fair, With eve - ry star that spark - les there.

The mountains and the rocks he made,
 And all the hills in order laid;
 He poured the water in the seas;
 He made the grass, the herbs, the trees,
 The valleys, and the fields so fair,
 And every flower that blossoms there.

The lion and the tiger bold,
 The sheep and cattle of the fold,
 The little birds that sweetly sing,
 The insect with its beauteous wing,
 The fishes—all we see that's fair
 Or good—He made and placed them there.

これらの讚美歌を眺めわたしてみると、歌詞はいつても種々のものがつけられて歌われているが、曲自体はちやまな変化が加えられ、変容を示している。こゝした音楽上の問題がいつてもいつて簡単に触れておへんが、さうである。(二二七)

(国立音楽大学)

and Arranged by Rev. Charles H. Richards》(New York, 1882.)

(註五) 《Hymn and Tune Book, for the Church and Home》(Boston, 1871.)

(註六) 《One Hundred Tunes, with Hymns and Poems, for the Use of Infant and Juvenile Schools, and Families; to which is Prefixed a Simplified System of Teaching to Sing at Sight. Prepared at the Request of the Committee of the Home and Colonial School Society by Charles H. Purday.》(London, ?)

(註七) 《Sacrifice of Praise, with Tunes. Psalms, Hymns, and Spiritual Songs Designed for Public Worship and Private Devotion. With Notes on the Origin of Hymnes》(New York, 1872.)

(註八) 《Songs of Christian Praise with Music. A Manual of Worship for Public, Social and Private Devotion. Selected

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(二十八)

津 守 真

夏 休 み

幼稚園や学校にしている子どもにとっては、夏休みには、ふだんとは違った過ごし方をする事ができる時である。きょうだいや家族とゆつくりと親しみ、また、自分自身の興味を持続させて追求することもできる。毎日、きょうだいや家族とだけ過ごすときには、ぶつかりあうことも多いが、一緒に面白く遊ぶ機会も

多くある。具体的なことは、きょうだいの年齢や家族の状況によって異なるが、子どもにとっても親にとっても、幼稚園のあるときでは得られない体験がある。夏休みについては、すでにふれたことがあるが、ここでは五歳児の夏休みの着せかえ遊びの一例について考えたいと思う。

着飾り

8月9日

子どもたちはままごとをしはじめたが、ぶつかり合いが多くて、軌道にのらないように見えた。(ここの子どもたちは、五歳、六歳、三歳の女児である) 私が一緒にはいっても、面白くならない。そのうちに、三歳のYが母親にちり紙でリボンをつけてもらった。それを見て、他の二人の子どもも、ちり紙でリボンをつくり、Yの肩や頭につけることに熱心になりはじめた。(写真1) 私もこれは面白いと思い、私なりに身体に飾りつけるものを



▲ 写真 1

考えて、ベルト、ゆびわ、うでわ、くつなどを紙で作りはじめた。子どもたちもいろいろ作り、互いに飾りつけ、皆、上ぎげんでしずしずと歩いた。

頭や肩にちり紙の花などをつけると、自分が花やいだ気持になつて、歩き方までかわってくる。私はいろいろ考えて服飾品を作つた。そのことは全体を活気づけるのに役立つのだらうと思うが、子どもたちの最大の関心はちり紙のリボンだった。薄いちり紙を扇状に折り、根元でまとめて束ねたちり紙は、ひらひら動いて、指輪や腕輪よりもはなやかな感じを与えたのだらう。その同じリボンを、ひとりの子どもは頭につけて飾り、ひとりの子どもは足首につけて靴にする。足をリボンで飾るときには、泥の地面を歩く足ではなくって、ひらひらと動く花びらと同じように舞う足となり、あるいは、ベガサスのように千里を飛ぶ靴となるのだらう。実際には歩いていても、気持の上では宙を舞い、空を飛んでいると云つてもよいだらう。頭を花で飾る子どもは、昂然と頭を上げ、はなやかな高揚した気分で王者のようにしずしずと歩む。同じちり紙のリボンをつけるときにも、突差の間に子どもたちの個性があらわれる。そのような個性は、このときだけでなく、長年月にわたつて、いろいろの場面でくり返しあらわれるようであ

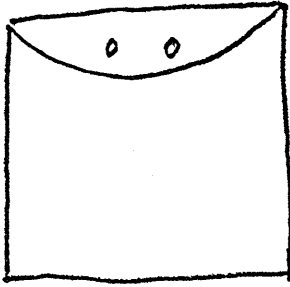
る。

着せかえ

夏休みに入ったとき、市販の紙製着せかえセットを買っておい
た。子どもたちはそれぞれ好きな服を選び、めいめいの箱にいれ
て持っていた。そして毎日のように、それを持ち出して、互いに
しゃべりながら遊び、服や靴の取りかえっこをし、批評し、言い
争いなどしていた。

8月19日

五歳の子どもが折紙に図1のようにかき、



▲ 図 1

「ドンコちゃん」と名
づけた。そして三人で
いろいろの模様を折紙
に描き、洋服と云って
ドンコちゃんにさせて
みる。どれを着せるか
で三人の間で大きわぎ
して選ぶ。そしてまた

新しい服を次々に作る。

「これ ふだんぎじゃないよ」

「なーに？」

「よそゆき」

「これドンコちゃんのおリボンよ」（銀紙を切って、ぼたんと云
っているうちに、リボンになる）

「リボンは、こう横にした方がいんじゃない？」

「ドンコちゃん 太ってるのねー」

「ドンコちゃん、あした幼稚園にいくのよ、幼稚園にいく洋服
作りましょ」

「これふだんぎ？ ふだんぎじゃない？ どっち？」

「これ幼稚園のお誕生会のよ」

「これふだんぎじゃないわねー」（自分で感心してながめる）

「ドンコちゃんの洋服よ、ドンコちゃんておしゃれねー」

「あしたはピクニックなんだからね」

「あ、あたしにピクニック用の洋服作らせてー」

.....

こうしておしゃべりしながら、きせかえの洋服づくりが延々と
つづく。

着る こと

このような子どもの着せかえの洋服づくりを見ていると、子どもは衣服に大きな関心を持っていることがわかる。その衣服への関心の中には、衣服の持つ社会的側面があらわれている。ふだん着とよそゆき、幼稚園にゆく服、お誕生会の服、ピクニック用の服など、用途に応じ、社会的場面に応じて、衣服の種類が違ってくる。しかし、ここで子どもが示している衣服の社会的側面は、固定した社会的要請への適応ではない。むしろ、いろいろの社会的場面に応じて、子ども自身が用意する自分自身の姿と云ってよいであろう。よそゆきには、外出という日常性とは異なった晴れの場面に出るとき、最高の自分自身のイメージをあらわそうとする。幼稚園にゆく服は、仲間の眼に映る自分自身の姿が、心どこかに想定されているであろう。ピクニック用の服には、家族と一緒にお弁当を食べたりするときの明るい楽しさの感情が反映されるだろう。

この日に作ったドンコちゃんの洋服は紛失してしまって、具体的に考察することができないのは残念である。しかし、この頃に作られた多数の衣服の描画をみると、同じよそゆきでも、子どもによってさまざまな描き方をして個性があらわれている。ある子

どもはきれいな花模様を飾り、ある子どもは縦と横の線の格子縞をいくつも作る。またある子どもは水平の波線によって層を分ける。外向きにはなやかに自分自身を統合してゆこうとする子どもも、水平と垂直軸によって基準点を見出そうとしている子ども等々、幼児期の子どもは、しばしば、自らの精神的努力を描画の中にあらわす。自分自身が気に入る図柄や形を見出すまで、子どもはいろいろと試み、探すのである。子どもが衣服に対して関心をもつのは、衣服を通して、自分自身を探究しているのではないかと思われる。

着せかえという幼児の遊びに、衣服の根源的性質を見ることが
できる。

えらぶこと

きせかえの遊びには、多くの洋服の中から、自分の人形にふさわしいものをえらぶという行為がふくまれている。子どもは、多くの可能性の中からどれか一つをえらぶことにより、その人形の個性を作り出すことができる。人は有限の世界に生きているのであって、一つをとり上げ他を捨てることにより、その人の個性が

明確になってゆくのである。衣服をえらぶとき、現実の有限の世界では、人は自分にふさわしいものをえらび、他の可能性を捨てる。子どものきせかえ遊びでは、一度選択したものを容易に変更できるけれども、結局は一つをえらばねばならない、そうでなければ自分の人形の性格をきめることができない。自分の個性にかなうからその衣服をえらぶようになるのであるか、あるいは、その衣服をえらぶことによって個性が作られてゆくのか、このいずれであるのかははっきりとはきめ難い。しかし、一つのものを選択するに至るところにその人の運命があるのであって、そのことがその人の個性を作り上げてゆく。未来の選択は、過去に縛られるのではなく自由に決定されてゆくのであるけれども、一度び選択がなされることによって、個性が明確になってゆくのである。

きせかえ遊びの中で、子どもは自分の人形に合う衣服をえらぶ行為を何度もくり返し、衣服を通して自分の個性を作り上げる試みをしていると云えるのではないだろうか。夏休みの間中、子どもたちは自分のきせかえの衣服の箱を持っていて、取り合ったり、交換したり、貸し合ったりしていた。自分ではない、他人の衣服を着けることは、自分の中に新たな可能性を見出す試みである。それによっても自分の個性に新たな局面が開かれてゆく。実際の衣服の選択においては、デザインやスタイルのみでなく、

材質や価格その他いろいろの要素がはたらいて選択が行なわれるが、きせかえ遊びでは、選択はもっと純粹である。それだけに、個性を発見し作り上げる試みにもっと直接に結びついているのではなかるうか。

ポーちゃん製作

8月20日

五歳の子どもが、大きな包装紙に人形の足を下の方から描きはじめた。一枚では足りなくて、もう一枚、大きな包装紙を出してやった。それに上半身をつなげて描いた。足の先には草履が描かれ、足の部分は縦横の格子縞を密に描いた。洋服の部分も、縦横の格子縞が描かれている。描き終ると、本物のスカートなどいろいろ持ってきてその部分に置いてみたり、ぬいぐるみの動物を持って胸に抱かせたりして感心して眺めている。とても立派な人形だったので、母親が段ボールの厚紙を出してきて、のりで貼るのを手伝った。でき上るとすぐに、六歳の子どもと二人で輪郭をはさみで切り抜いた。それは子どもが肩まで持ち上げても、身長の子

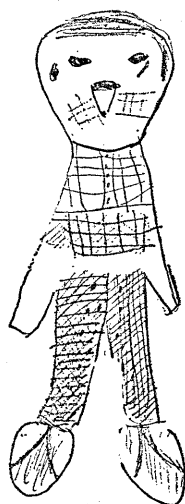
倍以上になる大きな人物だった。(図2)

「あ、ポーちゃんできた」と二人は感激する。

そのあと、一緒にねころろがったり、ねんねんころりをやってあやしたりして遊んだ。下の二人が頭と足をもって歩くと、「そうやるとかえってかわいそうなのよ」と年長の子どもが批判する。

切り抜くこと、自在に動くこと

ポーちゃんは、きせかえの小さな人形と違って、子どもの背丈よりも大きな人形である。それを厚紙で裏打ちして切り抜くと、生きて動くものとして飛び出してくるような印象を与える。その



▲ 図 2

紙は、片面は波型の段になっており、片面は段ボール紙でできた、自在に動く厚紙である。ここで、保育者である母親が、突張った厚紙でなく、この自在に動く段ボール箱に目をつけたことは重要である。子どもは実際にそれを手でかかえて動かしたり、一緒に歩いたり、自分の椅子に坐らせたりできるのであるから、切り抜いた大きな人形は、自分と同じように動く生きた存在として把握されると云ってよいであろう。それだから、ポーちゃんを切り抜いて、背景の紙からそれがとび出してきたときに、子どもたちは感激した。実際にこれから何日も一緒に遊ぶ相手となっただけでなく、この時から十年以上も子どもたちの記憶の中に生き続ける存在となった。

命名すること

この紙製の人物画が切り抜かれた途端に、これがポーちゃんとな付けられた。

固有名詞の名前がつけられるということは、子どもの心の中に生きた人間存在となることだと云ってよいであろう。それは社会的身分を示す呼称でもなく、親族関係を示す呼び名ではない。また実際のきょうだいや友だちの名前でもない。思わず口から出る愛称である。子どもの人形には、しばしばこうした名前がつけら

れる。また可愛がつている猫や動物にも似たような名前がつけられる。そうするとその人形や動物が、新たな存在として、生活の中に仲間入りする。それは子どもの生活の一員として人格をもって生きはじめる。それだから、ポーちゃんの頭と足を持って歩くことに對して、「そうやるとかえってかわいそうなのよ」という抗議も出てくる。

名前のつけられない存在であるうちは、物理的には存在していても、人間の愛情をもって交流する精神的存在としての認識は稀薄であると云えるのではなからうか。もちろん、名前を持たない段階で、抱いたりおぶったり、笑いかけたりすることが素地となっており、その時期の体験は子どもにもおとなにも重要である。

子どもにとつて、その時期の人形、あるいは人物に對する認識は混沌としており、あるときには抱きかかえて可愛がり、あるときには、放り投げて踏みつけ、子ども自身の愛憎さまざまな感情がそのままに投影される。その人形が固有名詞をもって呼ばれるようになったとき、子ども自身の精神界の中で、人形は意味連関をもって把握されるようになったと云えよう。人形はもはやいかようにでも扱える物体ではなく、人形自身の心をもった存在となるのである。

夏休みに、きよだいで熱気をもって、くり返し、着せかえ遊びをし、自分たち自身を着飾り、その後大きな人形のポーちゃんを作ったことは、何週間もきょうだいで過す夏休みだからできたことであるように思う。ひとつずつを取り出せば、とり上げるに足りないように見えるあたりまえの遊びである。しかし、どれも一日だけだったら生れない遊びであつて、何週間もつづけて遊ばれることによつて成り立っている。幼稚園や学校での生活に多くのエネルギーを費さねばならない時期にはできない家庭での遊びである。

何度も述べたように、きせかえ遊びは単に衣服の嗜好を養う遊びではない。いろいろの社会的場面を予想しながら、自分にびつたり合う自分自身の形を探究する努力である。また、それは現在のことにとどまらず、未来における自分自身の探究に連なっている。そのことは、きせかえの中でも、花嫁衣裳に特別な関心が表示されることに直截にあらわれている。ここでは花嫁衣裳がきれいだから興味をもつだけではない。ウェディングドレスや頭飾りを描きながら、いつか自分自身が花嫁になるときの姿を夢みている。そのことは、ここでは示していないが、子どもの会話や行動

から見てとることは容易である。衣服遊びの中で、子どもは現在と未来の自分自身のさまざまな可能性をためし、その中から自分自身にかなう形をえらび、自分の個性を作り上げてゆく試みをしている。*注

衣服の遊びやきせかえ遊びは、ここで終るのではない。これから何年にもわたり、さまざまな形でつづいてゆく。考察すべきことは多くあり、ここでとり上げたことはその一部にすぎない。もっと考察すると面白い課題であると思う。また、ここできせかえ遊びをとり上げたのは、たまたま、ある年のある子どもたちに起ったこととしてとり上げたのであって、夏休みの遊びの一つの例にすぎないことは云うまでもないであろう。

夏休みが終って秋の学期になり、子どもたちが幼稚園に出てきたとき、私共は子どもたちがひとまわり成長したような印象をうけることがしばしばである。それは当然のことである。子どもたちはまとまった生活時間をもって、自分自身の中に沈潜し、あるいは自分の壁をのり越えて、新たな自分となる努力をして来ているのであるから。

(つづく)

注 『子どもにとっての衣服の意味』として、ここで取り上げたのとは別の側面について、私は『子ども学のはじまり』（フレール館、昭和五十四年）の第二部第三章で考察してある。

※

※

※

史料紹介

エリザベス・ギヤスケル

『マイ・ダイアリー』（最終回）

笹川真理子 訳

一八三八年 三月二十五日 日曜日 夜

私のかわいい子のほんの幼い人生の上にも、一つの新しい時期が訪れてきました。明日からあの娘は幼稚園へ行くのです。私は生まれつき優柔不断と言うより、むしろもう遅過ぎるという時に、自分の下した決定を悔やみがちになります。でも今になって幼稚園に行かせることが、この娘にとって正しかったのかどうか、迷い始めているのです。というのは、どちらにも十分な理由があるからなのです。あの娘は家庭において喜びを持ち、私達皆を愛し、私を信頼してしてくれます。それは現在私にとって大変にしあわせなことです。幼稚園へ行くことによって、それらの事は弱まるかもしれないのです。あの娘の精神がもつと発達した

なら、正しい考えを与えられるかもしれませんが、今はそっとしておきたいと思っている事があります。しかし幼稚園ではそれらの意味をあの娘に教える子ども達に出会うかもしれない。それは、死とか偽りなどに関してです。

しかし私達があの娘の幼稚園行きを望む理由もまた強いのです。それはどんな分野の知識も急激に増そうというためではありません。というのは、ウィリアムも私もこれを好まないからです。そうではなく、言うことをきく習慣を徹底し、忍耐によって困難を克服することを学ばせ、そして少しの間でもあの娘を落着かせるためにです。

あの娘は九時半に出かけ、十二時に帰ってくるはず。そしてたとえ保育があるとしても、今のところは、きっと午後は幼稚園はないことでしょう。私は午前中だけで十分適応力がつくと思

いますし、午後には戸外などで私やミータと一緒に過ごしてほしいと思っています。

私は我子を自分から進んで手離して、私に一番の責任があることを忘れるような、怠けた母親になるのではないかと心配しています。私はこの点で、もっとよい母親となるように努めましょう。私はできるだけ自分で、あの娘を送り迎えるつもりです。

私にはこうしたい訳がいくつあるのです。一つには、幼稚園の外ではあの娘はあまり他の子ども達と一緒にいるべきではないと思うからです。それは皆、お行儀の良い、しつけのしっかりした子ども達だとは信じています。しかしあの娘は年下なので、どんな誤った考えも人一倍簡単に飲みこんでしまう恐れがあるからです。

それから、帰る道すがら、幼稚園で起こったどんなささいなき事も、すべて私に話すようにさせたいと思っているからです。私もしあの娘の考えが混乱したらそれを正し、あの娘の気持ちに納得させてやることができるでしょう。

私はこの幼稚園行きを、あの娘の一番の目的を思っただけで決めるようにしました。今はその結果を待たなければなりません。ただあの娘に対する神の祝福を祈ります。

前回書いてから、あの娘と私は宗教について一緒に話し始めました。私はあの娘に神の恵みや愛のような、あの娘にも理解できると思われる純全たる真実を話しました。神が夜、静まった家の私の私達を見守っていて下さることなども。あの娘は今ではこの

大切なことに関する限り、正しい考えを持っていると思います。初めはとも、具体的な質問をして私を困らせました。「いつ——眠るの」などと言って。しかし今では、私達は声を潜めて語り合っている、あの娘は神についての話を聞くのが好きです。それに神を、「すべての善きものを施こされる方」（もちろんあの娘の言葉ではありませんが）として、非常に正しくとらえて言うのです。

あの娘の伯母のリジーがまもなくここへやって来る予定なので、私は今晚あの娘に、私達みんなが元気なら、リジー伯母さんはここに三週間いることでしようと言いました。「でも誰に、私達がみな元気であるようにお願いしなければならぬの」（マリアンヌ）「神さまよ。」

少し間をおいて、あの娘はこうつけ加えたのです。「私、リジー伯母さんも元気なように、神さまにお願いするわ」

あの娘はクリスマスの日だけでしたが、初めてチャペルへ行っただけで、少し疲れたように見えました。しかしチャペルへ行ったことを話すのがとても好きなようです。

あの娘は自分の名前の大文字をみんな選んで、いぬ、うし、うま、などの言葉を作るように並べることが出来ます。あの娘は「ちいさなはたらきばち」と言うことが出来ますが、その言葉に十分な意味を付けているのかどうかはわかりません。

あの娘の気質は以前と同じ、頑固という欠点を免れないままです。かなり不機嫌な事がある事をするように言われると、あの娘はまるでバカのように手で口をあわわわとたたき続けるのです。

ですから、あの娘をその気にさせるのはとてもむずかしく、賢明な治療法を見つづけるのは、困難の最たるものなのです。

いろいろ試みながらも、時々軽くむちを打たなければなりませんと言うのは、とても残念なことです。それは悔やみながら、優しく行なわれました。そしてそれは怒りの気持ちも少しも起こさず、必ずあの娘を素直にさせました。あの娘は普段は優しい気持ちに満ちたかわい子なのです。

あの娘は少し気軽過ぎると思われるほど、貧しい人々に心配りをします。「私は、ママとパパとミータとエリザベスとフアンイーと、かわいそうな人々を愛します」と。ウィリアムは、私があの娘の感受性を刺激し過ぎると心配して言いますが、私はそうではないことを望んでいます。なぜなら私が、彼と同じ程それを心配しなればならないからです。

今晚は小さなミータについて書く時間がありません。私は次の「章」をミータにあてましょう。その間、ただ二人の幼い姉妹達はお互いにとても仲が良いようだと言っておきましょう。神が二人を祝福され、あの娘達を守って下さいますように。でもそれは私の意志でなされるのではなく、あなたの、主の御心によってなのです。アーメン。

四月八日 日曜 夜

こうして書くのはちょうど二週間ぶりのことですが、あの時以来、私はマリアンヌについて、悲しい恐れに襲われました。先先

週の日曜日、あの娘は夜八時頃、⁽¹⁾クループにやられたのです。私達は犬のほえ声のようなせきを聞きました。(あの娘はずっと鼻風邪をひいていて、一日中顔色がすぐれず、ぐったりしていたのです) 私達はあの娘に吐根を二十四錠飲ませました。ワインとサム、それにパーティントンさんも来て下さいました。彼らは、私達がとても正しく処置したと言って、甘黍粉をあの娘に処方して下さいました。

もちろん、非常に多量の薬や、必要な家での引きこもりによっても、あの娘はそんなに良くなったわけではありませんし、幼稚園にも行けませんでした。しかし、私達はあの娘が私達のもとに残されたことをとても感謝しなければなりませんし、私は本当に心から恐れながら、感謝することを望んでいるのです。かわいそうに、あのエディー・ディーンちゃんと同じ夜にクループにかかり、次の月曜日になくなってしまったのです。

ああ！ 神が私に与えるにふさわしいとお思ひになった苦悩を、完全に甘受でできますように。そして、ああ主よ、私が私のいとしい子らを守ることをあなたに祈る時、私があまりにあの子らに夢中になりすぎませんように。マリアンヌの示すあらゆる思いやりによって、私はますますあの娘を愛するよう思われるのです。

前回、日記をつけた時には、時間が遅くなってミータについて何も特別なことを書かずじまいでした。この日記に以前に綴ったことを見ては、私はこの二人の子どもの達の違いに気づいて楽しんで

でいます。

ミータはあまり妨まれることなく健康に恵まれたせいだと思ふのですが、マリアンヌが同じ年にそうであったのより、ずっと自立心に富んでいます。あの娘は多くの子ども達が歩くのと同じ位速く、どこでもはい回れます。もしドアが開いていれば、台所への廊下もまっすぐに進んで行くのです。あの娘は何につかまっても立つことはできるのですが、少しも歩こうとはしません。抱かれていますよりも、喜んで一度に一時間も床の上で遊んでいるでしょう。いつも歌ったり音をたてたりしていますが、ちっとも話そうとはしません。あの娘はとても愛情深い子ですが、マリアンヌほど感じやすくはありません。たとえば、あの娘は少しも笑われるのをいやがらず、むしろおどけるのを楽しんでるのです。

しかし私は、あの娘は幾分甘やかされの恐れがあると心配しています。というのは、ほとんど家中の者が、あの娘をかわがるからです。あの娘はとても気まぐれで、全くつまらないことでも少しけなされると、悲嘆にくれ、小さな癩癩を起こしたりします。私は時々、あの娘は十分に制されていないのではないかと不安に思っています。エリザベス(あの娘の乳母)は、いつもこう言っているのです。「かわいそうだけど、もう——する時間ですよ」と。私は私の知識に従って行動できるかどうかわかりませんが、これは間違っていると思います。

ミータはパパを心から愛していますので、あの娘の小さな癩癩を克服するには、彼の威力がとてきくと思います。もし彼が、

「ミータの悪い子、」と言うなら、あの娘は心も張り裂けんばかりに泣くことでしょう。ですから、もちろん、私達はそのようなあの娘の感受性を刺激することは避けています。

あの娘は好きなものの何でも一口くれる、気前のいい子ですが、おもちゃについては、あきらめがよくありません。マリアンヌが何かを使って楽しんでいるのを見ると、いつもそれがあの娘の手にしたいものなのです。あの娘は他の人々が持っているもので、食べたり飲んだりできるものは何でも欲しがり、だいおうやマグネシアの果てまで欲しがるのです。

普段、姉妹はとも仲良しです。時々、マリアンヌが、傷つけるとわかっていながら、怒りやはつきりとしたいじわるからでなしに、小さなミータをいじめるのを見ては悲しくなりますけれど、私はもちろんそれを止めますが、それは愛の力によるに違いないと思っています。神が二人を祝福し、守つて下さいませうに。

一八三八年 十月十四日 日曜 夜

私のかわいい娘達は、二人ともかなり元気で健康です。なんと私は感謝しなければならぬことでしよう。そして私は、私の子ども達の中にある神の恵みに対し、心から感謝を感じています。私はあの娘達がすべての面で成長していると思います。

マリアンヌはお誕生日(九月十二日)から、読みとお裁縫を始

めました。そして特に直線縫いはかなり上手になりました。私は、何かあの娘を夢中にさせるものを、喜こばしく思っています。というのには、あの娘を夢中にするものを見つけるのは、ちょっとむずかしいと思っており、あの娘はどんな仕事にも一生懸命にならないからなのです。

この点で、ミータはとても違っていると思います。あの娘はほとんどいつも忙しくしています。それは時々、確かにいたずらのこともありませけれど、あの娘は二人の姉妹のうちでは、より精神的です。

私はマリアンヌをこつこつ励ませたいと念願しています。そして私は、私があんな娘に良い手本を示してはいないのではないかと心配しているのです。私はあんな娘にろうそくの芯を作らせたり、絵をびょうどとめさせたり、物を数えさせたりしようとするのですが、あの娘はじきにどの仕事にも飽きてしまいます。これとは戦わなければならぬでしょう。というのは、私は経験によって、これがどんなにますますふえてゆく罪であるかということを知っているからです。

気質や言うことをきく習慣については、マリアンヌはとても良くなったと思います。あの娘が以前起こしていた頑固な癪癖はすっかりと少なくなりました。私は、あの娘が正しい事をしたという漠然とした欲求を見て、とても嬉しく思います。そして私は、そのような行ないは正しいかどうかとあの娘自身に時々判断させることによって、あの娘の良心を鍛えましょう。あの娘はとても愛

情深いのですが、これはまた感謝しなければならない事の一つなのです。あの娘はまだ激しやうい性格を克服していません。そして私達は、あの娘を相当落着かせる必要があると思っています。そうでないと、あの娘は募るいらだちに見られる疲労でとても参ってしまうでしょうから。

十月二十八日 日曜 夜

この前は中断してしまいましたが、今晚はそれを埋め合わせましょう。マリアンヌと私はあの娘の健康のため一両日中に、プロスペクト・ヒルへ行く予定です。あの娘の成長はとても遅れているので、あの娘の叔父のサムは冬が始まる前に少し転地療養するのが、あの娘にとって好ましいと考えたのです。それがあの娘のためになるよう望んでいます。しかし、私は少し心配しているのですが、よその家には、(食事、温度など)人が調節できない多くの事があるのです。

私は前回に、あの娘が四歳(九月十二日)から規則的なちょっとしたお稽古を始めたことを言わなかったと思います。それ以前は文字を、確かに一部は遊びの中で学んでいました。あの娘は「ママのお稽古」で、一日一語から始めました。しかし、もちろん、それは新しい一語であり、今では時々一行近くを読みます。あの娘はそれが好きなようで、精を出しています。時々あの娘のお裁縫のお稽古で、(それは六目縫うものなのですが)私は自分

が十分に忍耐強くないと心配しています。ああ、すべての感情を御手にしていらいしやる神よ、私をもっと平静にして下さい。

あの娘位、気持ちのわかる子はいません。あの娘は私が悲しうに見えたり、何かが私を不安にしていると思うと、私を慰めようとい心を尽くすのです。あの娘の大きな欠点は訳のわからない頑固の発作です。それはなくなりつつあると思いますし、それは、あの娘の仕事や楽しみに関する他人への依存と忍耐とがないためなのです。私はほんの数語の感謝や祝福のささやかなお祈りを、朝晩あの娘に教え始めました。あの娘がこの習慣に敬虔な気持ちで十分にこめているかどうかはわかりません。しかし、何か目に見え、具体的なものを起えた存在に、あの娘を導くことは好ましいことだと思えます。そしていつか、お祈りが捧げられている方に対して、もっと関心が示されることを望んでいます。

またあの娘は、毎朝ペペがドッドリッジの注解書を読んだり、お祈りしている時に加わります。私は時々、この礼拝はあの娘には長過ぎると心配になります。しかし、最初は憶病な人みしりと思われれることでひどく手こずったものの、あの娘はこれに加わるのを好んでいると思われれます。神よ、私のいとしいマリアンヌを祝福しお守り下さい！

かわいい小さなミータについて言うと、体つきはとてもよく似ていますが、マリアンヌとは全然違います。あの娘はもっと人受けの良い性格で、とても活発で、おどけるのを楽しみ、いつも自分で忙しくしています。しかしあの娘は、以前よりは良くなった

と思えますが、短気でわがままです。あの娘は食べられるものもいつでも喜んで与える、大変気前のいい子です。おもちゃについてはそう寛大ではありませんが、それについてもしばしば良い態度を示しています。あの娘は何か人を怒らせたり傷つけたりしたと思う時には、キスをするなど人を引きつける多くの方法を身につけています。

あの娘はとても言葉が遅れています——「どうぞ」と言おうとして「タタ」と言うだけがああ娘の言える唯一の言葉なのです。しかしあの娘は自分の前で話されるすべての言葉を理解し、認め、また身振りや音によって自分のこともわからせます。あの娘はここ二カ月に歩き出し、十八カ月にしてはともよく歩きます。最後の犬歯がちょうど生えて、私は他の多くの子ども達ほどには苦しなかつたものの、かわいい子の難儀が終わったのを嬉しく思います。

マリアンヌはこの二週間で、肉食を少し始めました。しかしミータにはいつもながらのあつさりしたものを食べさせています。神が私のいとしい子らを祝福して下さいように。 Ⅱ了Ⅱ

(津田塾大学)

註 (1) 偽膜性喉頭炎(子供喉頭や気管を侵し、激しいからせきと呼吸困難を伴う)

(2) *ipecac, ipecacunha* ブラジル産の植物の根で吐剤・下剤として用いる。

(3) どちらも下剤。

かつて、私どもの周囲に、「逢魔が時」と呼ばれる時間があった。日が落ちてあたりが灰色に変わり、ものの形がその闇におぼろに溶け出していく頃の呼称である。

「そんな時刻まで遊んでいると、魔ものに魅入られ、よくないことが起こる」と、子どもの戒めにも用いられていたらしく、私は、ただひたすら「オーマガドキ」という音の響きの凶々しさを恐れていた。

何故、そんなことになったのか、憶えていない。ある夕方、私は、家の門柱にしがみついて、薄暗く閉ざされた玄関の戸を見つめていた。ものの一〇メートルほど先に、不機嫌におし黙ってそれはある。然し、かけていって、開き戸に手をかければ、恐らくは、簡単に開くに違いない。或いは、「ただ今」と一声呼びさえずれば……。

にもかかわらず、私は、身動き一つ出せず、まだ燈火のつかない入り口を、ひたすら、見つめ続けていた。きつと、「オーマガドキ」に抱きすくめられ、金縛りになっていたのだろう。ほんの一寸でも体を動かしたら、或いは、ため息ほどの声でも立てたなら、この黄昏色の均衡が破れて、あたりは一斉に、妖しいものたちの世界に変わるように思えた。

昼が去って、夜が訪れるまでの境界、夕方は、昼にも属さず、未だ夜でもない。所属の明らかでないものに「妖異」のしるしを与えるのは、己れの日常を正当と位置づけて、生活の基盤を確保し、心の安らぎを得ようとする人間のちえであったろう。そのゆえに、日暮れ方は「逢魔の時」として、聖性を孕んでいた。人工の明りに追放された「オーマガドキ」それは、子どもにとって何だったのだろうか。問い直したい思いである。

(本田和子)

幼児の教育 第七十八巻第七号

七月号 © 定価二五〇円

昭和五十四年六月二十五日 印刷
昭和五十四年七月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレイベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

フレーベル館現代幼児教育研究会

15周年記念 全国大会が開催されます



■開催日

昭和54年8月5日(日)・6日(月)・7日(火)

■会場

札幌市 札幌市民会館

■内容

全体講座・分科会・記念講演等

■全体テーマ

「子どものやる気を育てる保育」

■講師

海 卓子先生・本吉圓子先生
藤永 保先生・山内昭道先生
中村 明先生・早川史郎先生
館 紅先生・桜井俊夫先生

■記念講演

三好京三先生

■会費

3,000円(資料代ほか)・別に宿泊費等実費

フレーベル館現代幼児教育研究会は、去る昭和40年に発足以来、幼児教育に携わる全国の先生方に親しまれ発展してまいりました。

ここ数年間は、全国大会を休会し、全国各地において多数の地区研究会を開催、大勢の先生方のご参加を賜りました。今年度は、現代幼児教育研究会創設15周年を迎えるにあたり、全国の先生方のご要望にお応えして、15周年記念全国大会を札幌市で開催することにいたしました。

「子どものやる気を育てる保育」の大会テーマにそって、充実した講師の先生方とともに、理論と実践を踏まえ、これからの保育にお役立ていただけるよう計画しております。

日程は上記のとおりです。ことしの夏は、ぜひ現幼研全国大会にご出席ください。

詳細につきましては、担当店よりご案内状をお届け申し上げます。

フレーベル館現代幼児教育研究会事務局

〒101 東京都千代田区神田小川町3-1 TEL(03)292-7781(代)

Made in Sweden

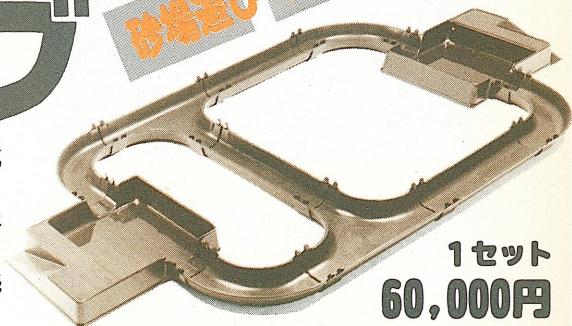


LekoLab

スウェーデン生まれの
砂場遊び・水遊び道具、新発売!!

レコラブ

- レコラブは、スウェーデン政府の発明助成を受けて開発された新製品です。
- スウェーデン・米国・西独・日本はじめ世界の主要国に実用新案出願中の製品です。
- 日本国内では、フレーベル館が一手に販売します。

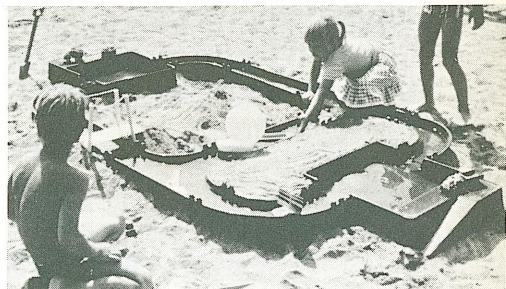


1セット
60,000円

レコラブの特長

- 組立てが簡単です。
- 丈夫で長持ちします。優れた品質のプラスチック（ポリプロピレン・ABS）
- 軽くて、コンパクトに収納できます。
- 砂場遊び、プール遊びなど、遊びがく〜んとワイドになります。

★フレーベル館では、砂場遊びをよりバラエティゆたかにする砂場用品を、多数取り揃えております。



くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館